

経度	緯度	遺跡名	時代	所在地	備考
136°47'	33°54'	老野	縄文(後晩)	大田Ⅲ	平安・中世
136°47'	33°54'	久保屋敷	中世	久々館	75-0300 愛宕山館
136°47'	33°54'	松屋	平安	野々一里塚	0304 浦田古墳
136°47'	33°54'	宮手	縄文(早)・平安	川	0349 金田館
136°47'	33°54'	上平沢新田	縄文(後)・平安	2326 2327 2328 2329 2330 2331 2332 2333 2334 2335 2336 2337 2338 2339 2340 2341 2342 2343 2344 2345 2346 2347 2348 2349 2350 2351 2352 2353 2354 2355 2356 2357 2358 2359 2360 2361 2362 2363 2364 2365 2366 2367 2368 2369 2370 2371 2372 2373 2374 2375 2376 2377 2378 2379 2380 2381 2382 2383 2384 2385 2386 2387 2388 2389 2390 2391 2392 2393 2394 2395 2396 2397 2398 2399 2400	2356 片善寺立
136°47'	33°54'	栗田Ⅱ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅱ	縄文(後・晩)
136°47'	33°54'	栗田Ⅰ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅰ	76-0048 中島
136°47'	33°54'	栗田Ⅲ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅲ	0668 沖田Ⅰ
136°47'	33°54'	栗田Ⅳ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅳ	0140 新里
136°47'	33°54'	栗田Ⅴ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅴ	0143 土籠尻跡
136°47'	33°54'	栗田Ⅵ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅵ	0151 尻掛Ⅰ-Ⅳ
136°47'	33°54'	栗田Ⅶ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅶ	0163 尻掛Ⅱ-Ⅳ
136°47'	33°54'	栗田Ⅷ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅷ	0173 尻掛Ⅴ-Ⅶ
136°47'	33°54'	栗田Ⅸ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅸ	0332 北日誌外谷地
136°47'	33°54'	栗田Ⅹ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅹ	1103 片善寺中島
136°47'	33°54'	栗田Ⅺ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅺ	2076 片善寺上久保
136°47'	33°54'	栗田Ⅻ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅻ	1186 土手田
136°47'	33°54'	栗田Ⅼ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅼ	2119 片善寺Ⅰ-Ⅲ
136°47'	33°54'	栗田Ⅽ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅽ	2146 片善寺畑
136°47'	33°54'	栗田Ⅾ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅾ	2168 四ノ屋Ⅰ-Ⅳ
136°47'	33°54'	栗田Ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田Ⅿ	2369 片善寺田
136°47'	33°54'	栗田ⅰ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅰ	77-0085 志和城礎定地
136°47'	33°54'	栗田ⅱ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅱ	0130 大日堂
136°47'	33°54'	栗田ⅲ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅲ	0163 小路口
136°47'	33°54'	栗田ⅴ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅴ	0160 大倉部
136°47'	33°54'	栗田ⅵ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅵ	1007 五郎部
136°47'	33°54'	栗田ⅶ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅶ	1045 南日誌清水蛇塚
136°47'	33°54'	栗田ⅷ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅷ	1095 森沼一里塚
136°47'	33°54'	栗田ⅸ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅸ	1207 大倉向田
136°47'	33°54'	栗田ⅹ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅹ	1225 大倉長沢尻
136°47'	33°54'	栗田ⅺ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅺ	1279 彦部久保
136°47'	33°54'	栗田ⅻ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅻ	1347 彦部赤坂古墳
136°47'	33°54'	栗田ⅼ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅼ	1350 彦部小学校敷地
136°47'	33°54'	栗田ⅽ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅽ	1376 彦部館
136°47'	33°54'	栗田ⅾ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅾ	2231 甘木下川原
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	2306 彦部藤井
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	2372 天明
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	78-0049 赤石川官堂
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	1305 白根金山
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	1316 佐比内, 中平
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	3060 彦部館
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	2383 代官館
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	2393 中屋敷いたこ塚
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	85-1207 林
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	1228 渡
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	1230 彦五郎屋敷
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	86-0036 片善寺林
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	0277 機塚
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	0379 村地塚
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	1307 数馬屋敷
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	87-0229 小深田
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	1028 船場
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	88-1302 片山崩屋
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	1323 キリシタン
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	65-0357 泉館
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	2278 寺館
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	66-0013 松本館
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	2105 稲穂館
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	2205 平沢館
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	67-0097 戸部御所
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	0251 大吹森館
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	2158 星山
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	75-0265 善義館
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	77-2015 善知鳥館
136°47'	33°54'	栗田ⅿ	縄文(後)・平安・近世	栗田ⅿ	86-1319 好地館

地形分類図及び遺跡分布図

栗田 I・II 遺跡

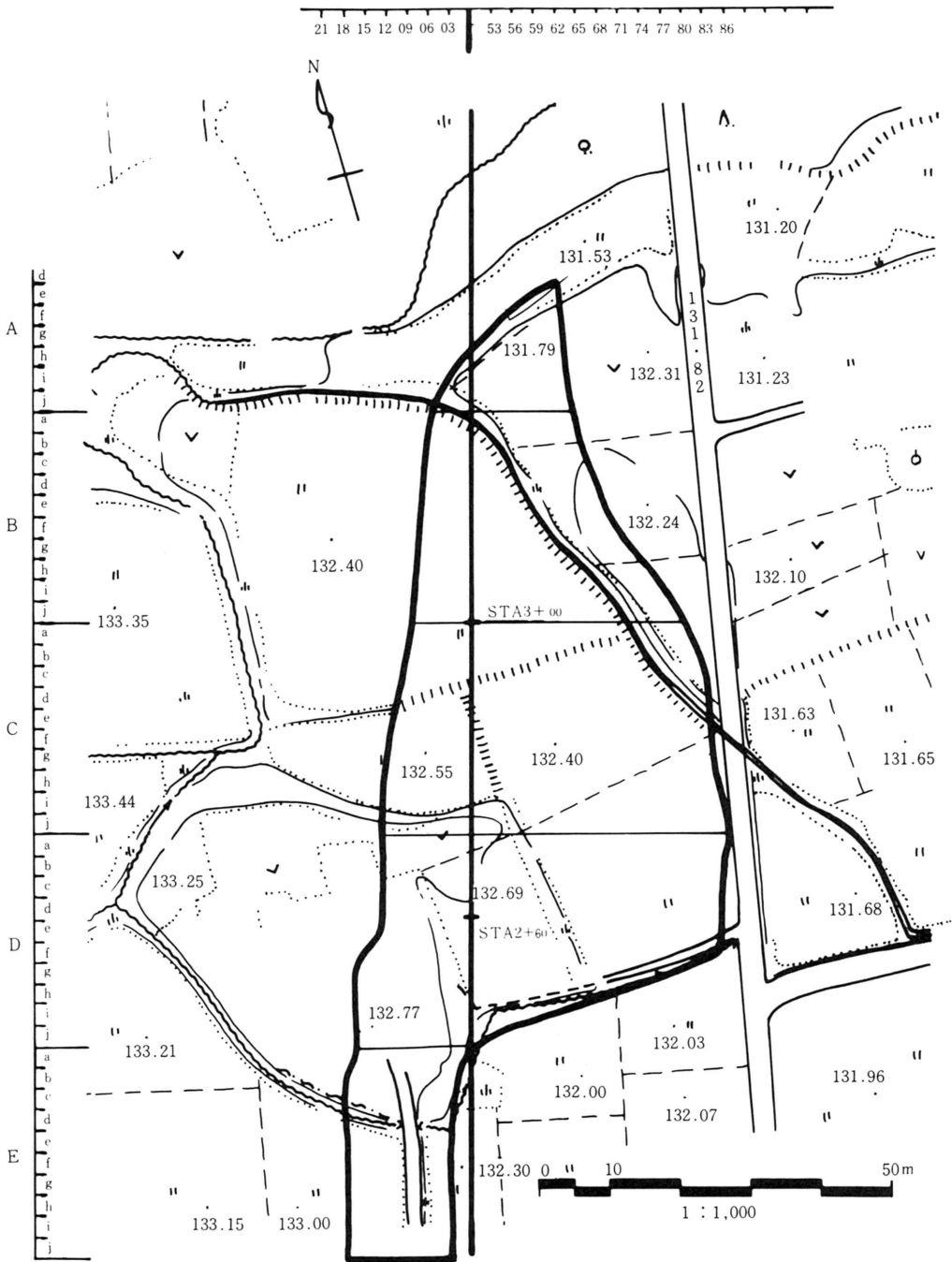
遺跡名：栗田 I・II（略号 K T I・II 78）

遺跡所在地：岩手県紫波郡紫波町上平沢字栗田41の138の1

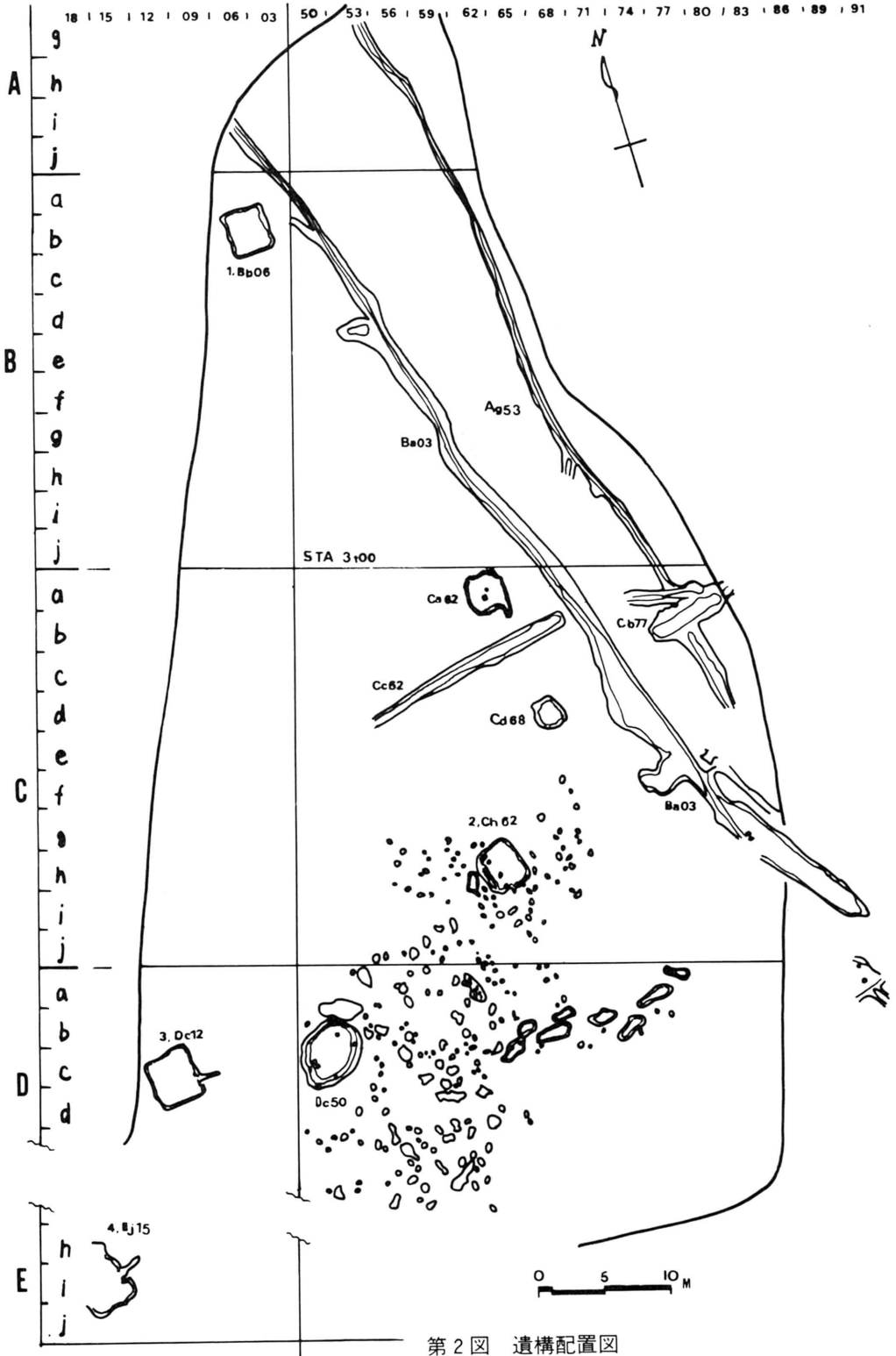
調査期間：昭和53年4月14日～7月31日

調査面積：I - 1360m² II - 2760m² 計4120m²

発掘面積：I - 1360m² II - 2760m² 計4120m²



第 I 図 栗田 I · II 遺跡地図 (工事以前の地図)



第 2 図 遺構配置図

I 位置と立地

当遺跡は、紫波町役場の西方約4.5kmのところの位置し、東に緩く傾斜する低位段丘面にある。遺跡の北及び南は一段高く、それぞれに上平沢新田遺跡、栗田Ⅲ遺跡が載っている。

当遺跡の現状は水田・畑地・宅地であった。すぐ南側は湿地を埋立て水田にしており、北側は小沢を隔てて緩傾斜地に続く。調査は開業中の東北縦貫高速自動車道へのインターチェンジ取付部について行なった。調査地域の北西部より中央・南東にかけて用水路があるが、この用水路は自然地形を利用して設けられた旧水路上に新たに設けられたと思われるものである。昭和40年以前の耕地整理等による削平及び盛土で自然地形は損なわれているが、僅かに栗田Ⅰ遺跡より東に延びる部分的な平場状の高まりが残存し、それらに付随し取り囲む形で水路が見られる。平場状の高まりの西側は高速自動車道本線によって被われている。伝承及び旧地名として遺跡南西方向に鬼清水と呼ばれる所があり湧水地及び湿地であったという。事実工事ともなう開穿では、高速自動車道本線西側に多量の腐植泥質土が露出し湧水等も見られた。又本線下・旧水路交点付近及び栗田Ⅰ遺跡の載る平場中央部付近の湧水等により地下水脈の存在も認められる。

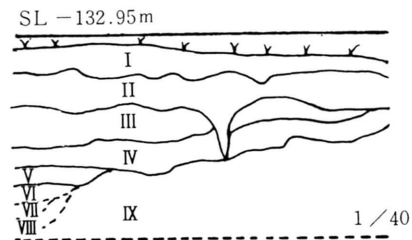
II 調査に於ける基準点

本遺跡に於いては、紫波 Interchange 平面図（日本道路公団）に示される STA3+00(茶杭)を原点とし、これと STA3+60(青杭)を結ぶ線の中軸線とした。この中軸線は真北から約16°東の方向を向いている。

III 基本層序

イ. 基本層序 当遺跡の基本層序は第3図に示すごとくである。調査区域のD E区西側にては第3層上面が遺構検出面である。他は開田削平後の整地盛土があり第4層面以下が検出面となる。又各層にはうねりがあり同一平面での広がりには認められない。

ロ. 遺物包含層 第一層・第二層に縄文時代から近代までの遺物の出土が見られる。これら2層は同一層の深度変化を示すものであるが、縄文遺物は現水路（ほぼ南北に流下）東側に多いという傾向も見られる。C/D56よりC/D80地点の南側の範囲はほぼ包含層を欠き、東側程厚く(約70cm)土盛がされてあった。



- I-暗褐色シルト質腐植土(表土層)「7.5YR 3/4」
- II-褐色シルト質 腐植土 「7.5YR 4/3」
- III-明褐色土(極細粒砂、木根攪乱)「7.5YR 5/6」
- IV-黄橙色土(シルト質粘質) 「7.5YR 7/8」
- V-橙 色土(細粒砂質) 「7.5YR 6/6」
- VI-橙 色土(シルト質) 「7.5YR 6/8」
- VII-橙 色砂質土(粗粒砂) 「 " "」
- VIII- " (細粒砂) 「 " "」
- IX-砂礫層(砂~大礫)

第3図 基本層序

IV 検出された遺構と遺物

主な遺構は、竪穴住居跡4棟、竪穴状遺構3基、焼土遺構9基、掘立柱建物跡と見られる柱穴様土壌群、溝3条、その他である。

1. 遺物包含層出土遺物

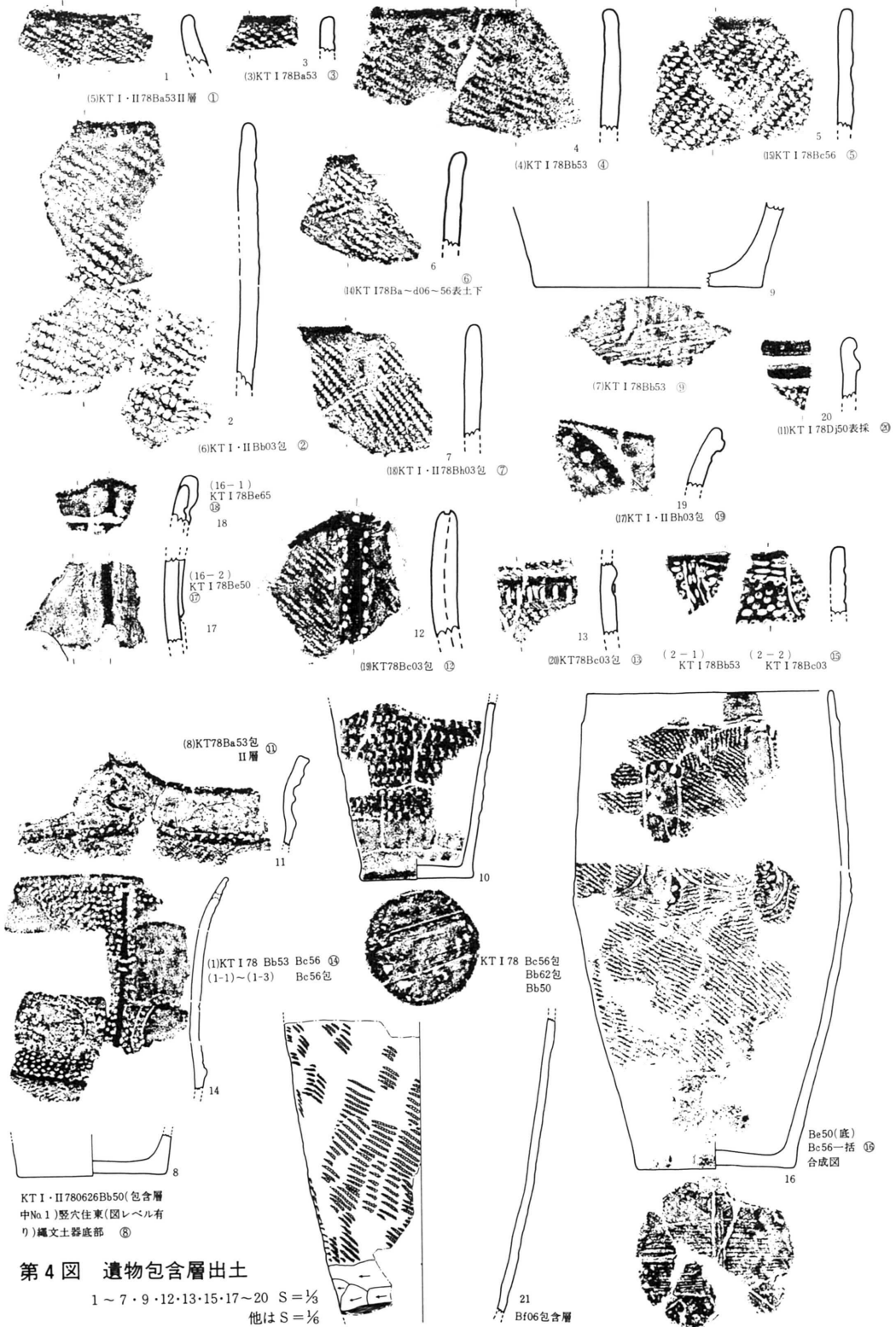
イ. 縄文時代遺物 (第4図、第1表、写真11図)

縄文式土器

出土破片数は800点、出土位置毎の合計推定数は100種、その内ほぼ完全に復元できたもの0点、採拓記録を行なったもの25点である。主なもの20点は一覧表(第1表)にて示してあるが、それらの内特徴あるものについては以下の通りである。

図の1~7は斜行縄文が回転施文されている粗製土器である。これらの器形は大半が深鉢型である。図1については内傾気味の口縁を有するものと推定される。8~9は底部のみの破片で上部がどの様になるのか不明のものである。10は体下部より底部まで接合する。一覧表に示した通り胎土は砂質であるが硬堅である。織物様文様の類例を検索したがまだ見当らず、体上部の文様がどの様になるのか不明である。11~20は地文以外に加飾されている破片で、1部推定復元が出来るものを含む。11は口縁部に文様帯を有する、3突起山形口縁のものである。頂部より蛇行隆帯文が降下し5cm下の横位区画の刺突隆帯に連らなる。底部までは地文のみが施されると推定される。12は波状口縁をなし頂部より両側に刺突を有する降帯が降下する。この口縁部は磨きでなく地文が施されている。13は胎土・施文上より明確な接合点を持たぬが前述の12に連なると思われる。この土器も文様帯は口縁部に限られる。14は大型の鉢の

第1表	図版番号	写真版番号	出土位置	器形	部位	色調	土性	内面(調整等)	外面(調整・施文等)	備考(推定値・cm)		
縄 文 式 土 器	1	4-1	11-1	Ba53	鉢	口縁	橙色	砂粒目立つ	磨き	L-R 細目の縄文	口唇部丸味を帯ぶ内傾気味	
	2	4-2	11-2	Bb03	"	口・体	浅黄橙色	細礫含む	"	L-R 弱く施文	口唇平坦 (口径24.0)	
	3	4-3	11-3	Bb53	"	口縁	淡赤橙色	砂粒	"	L-R 太目の縄文	" 他に破片あり(口径15.0)	
	4	4-4	11-4	Bb53	"	口~底	浅黄橙色	細礫含む	"	L-R 地文のみ	(口径20.5)	
	5	4-5	11-5	Bc56	"	口・体	鈍橙色	"	(横方向)磨き	R-L 弱く施文	内面磨きていぬい (口径21.0)	
	6	4-6	11-6	Ba ⁵⁶ ₅₆	"	口縁	黄橙色	砂粒含む	磨耗	L-R 羽状様重なり	内部に黒色部あり	
	7	4-7	11-7	Bb03	"	"	橙色	細礫含む	磨き	L-R 地文のみ	口唇丸味持つ (口径20.0)	
	8	4-8	11-8	Bb50	(#)	底部	浅黄橙色	石英含む	"	木炭底(一枚の葉)	内面に炭質物、未検物質あり(底径13.5)	
	9	4-9	"	Bb53	(#)	"	橙色	"	"	笹様稜	(底径10.8)	
	10	4-10	11-10	Bb62	"	底・体	浅黄橙色	"	撫で磨き	" 横引き凸隆文	織物風の効果を出す (底径10.3)	
	11	4-11	11-11	Ba53	鉢	口(底)	鈍赤褐色	砂含む(繊維?)	磨き良好	降帯磨き刺突、波状山形(一対?)	巾広い口縁・降帯刺突文区画・蛇行隆帯文(口19)(底9.5)	
	12	4-12	11-12	Bc03	"	口縁	鈍褐色	細礫含む	磨き	降帯刺突(竹管)、R-L細い	外反気味、降帯の垂下下限不明	
	13	4-13	11-13	Bc03	"	(頸部)	橙色	石英目立つ	"	横位降帯下びご様工具横圧	地文L-R 焼結は良好	
	14	4-14	11-14	Bc ⁵⁶ ₅₆	"	口縁	鈍橙色	"(三層状)	" 良好	縦・横位降帯区画、沈線刺突	巾広口縁、沈線内竹管刺突多用	
	15	4-15	11-15	Bc ⁰³ ₅₃	"	"	"	"	"	沈線区画竹管刺突	14)に類似(縦位降帯内に配置されるか?)	
	16	4-16	11-16	Bc56	"	(口~底)	鈍黄褐色	石英・砂粒	"	磨消文一部貼付文地文L-R	波状口縁か否か不明(口径22.5)(底14.0)(高43.0)	
	17	4-17	11-17	Be50	"	(口縁)	"	"	"	降帯沈線文、地文不明	類似破片多数	
	18	4-18	11-18	Be65	"	口縁	"	"	"	"	波状頂下降帯	17)に類似
	19	4-19	11-19	Bb03	"	"	橙色	"	剥落	波状部貼付刺突	磨き口縁、小破片	
	20	4-20	11-20	Dj50	"	"	褐色	"	黒変部あり	複合口縁様降帯上に沈線施文	R-L細くなる。内外とも黒変	
	21	4-21	"	Bf06	"	下部体	浅黄橙色	細礫含む	磨き	L-Rの地文のみ	地文のみ平口か (底径14.0)	



第4図 遺物包含層出土

1 ~ 7 · 9 · 12 · 13 · 15 · 17 ~ 20 S = 1/3
 他は S = 1/2

口縁の一部である。広巾の口縁の降下する隆帯を中心に刺突と沈線をもって加飾している。隆帯下部近くの両側にはそれらによる円文が配されているが磨耗等により細部は不明である。口縁部文様帯は刺突隆帯文により横位に画される。15は14と類似の加飾手法を持つものであるが同一物とは判定し難い。16は破片としては一応口縁部より底部までそろっているが、体部下だけが接合する。磨消縄文と、3点斜圧を施された貼付文の組合せである。口縁部は磨いてあり2cm程で横沈線で体部文様と画されている。この横位区画沈線上に3点斜圧貼付文が重ねられそれより磨消文が降下している。この磨消文は縦位の3点斜圧貼付文で終り横位沈線で連らなっている。磨消文の配置は横位区画沈線下3cm程の所より始まるものと交互でなされる。17は18と同一個体と思われ、波状を呈し隆帯と沈線を加飾された磨きの口縁である。19は刺突を有する大型のボタン状貼付文の加飾されたものである。磨かれているが波状をなすか否か不明である。20は表土下部D区の柱穴様土壌上端より出土したものである。

石器 (第5図・第2表・写真12図)

石鏃—出土数は一点と少い。虫喰い状の風化痕が見られるが極めて薄い作りである。

打製石斧—緑色凝灰岩製の荒ぼい作りのものである。

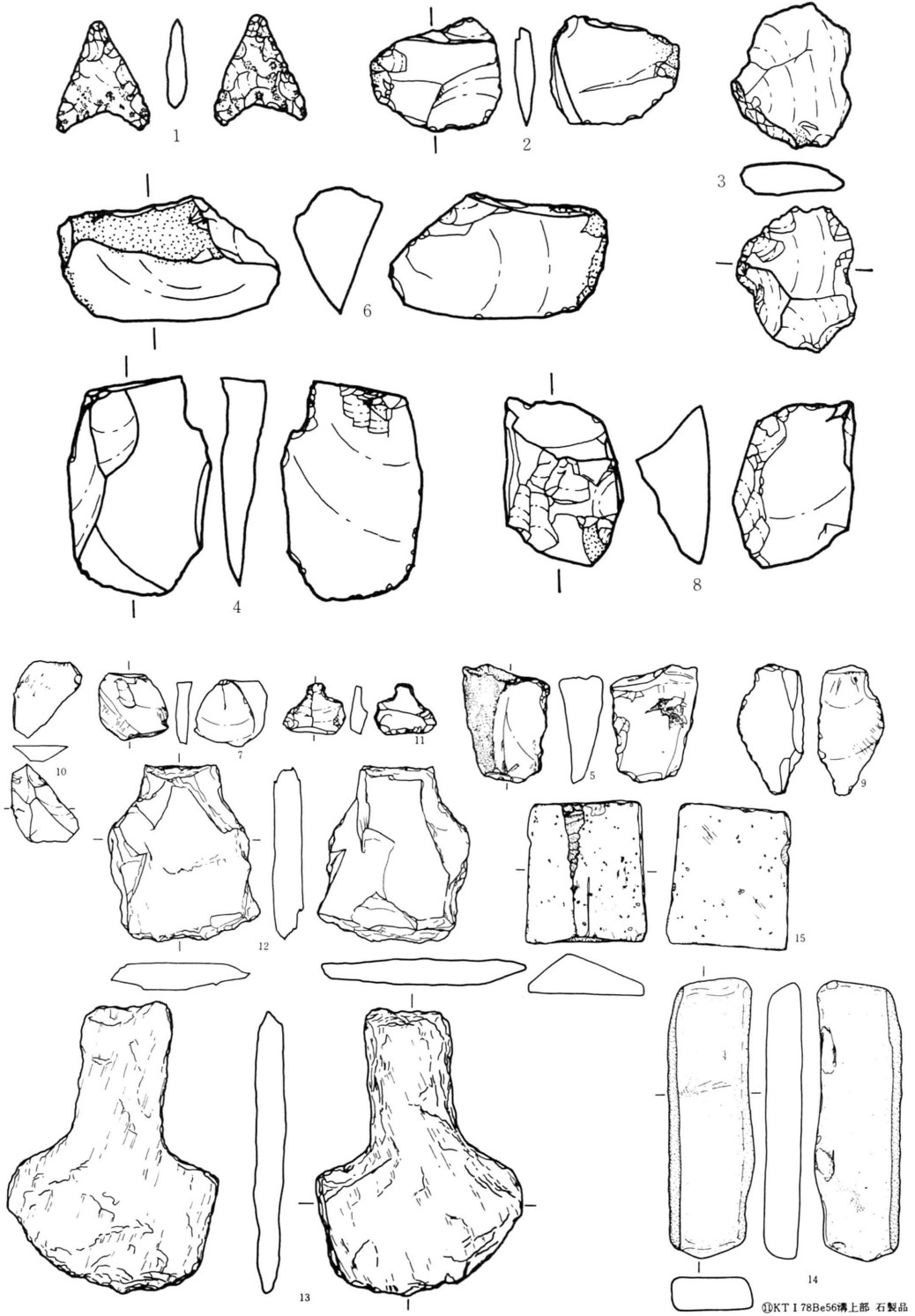
石匙—粗雑な作りである。先端に自然面を残す。

不定形石器

1)は楔状の形態で、調整痕を有する。使用痕は上端鋭角部にも見られる。6)は調整技法がほとんど確認出来ない。刃部ほぼ全周に使用痕が見られる。時期区分上は問題をもつ石器である。

7)は打製石斧の柄部と刃部両端が欠損したものかとも思われるが、図示上端(先端部)にも使用痕が見られる等、区分上問題を有するものである。8)も6)同様調整痕はほとんど見られない断面三角形の石器である。上端(基部)を除いて先端及び両側端に著しい使用痕が見られる。

第2表	登録番号	図版番号	写真版番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)			重量 (g)	材質	備考
						縦	横	厚さ			
石鏃	1	5-1	12-1	Bf65	II	1.6	1.4	0.3	0.5	玉髄	虫喰い状
	1	5-13	12-13	Be56 (溝)	砂	13.8	9.2	1.3	167.6	緑色凝灰岩	打製
	1	5-11	12-11	Ce77 (溝)	I	2.3	2.8	0.8	4.0	チャート	横型
不定形石器	1	5-8	12-8	Bh03	II	2.5	1.8	1.1	4.6	珪質泥岩	
	2	—	—	Ce77 (溝)	I	2.7	2.5	1.3	7.5	玉髄	
	3	—	—	"	"	1.2	1.7	0.7	1.0	タンバク石	
	4	—	—	Cj83	II	1.0	1.9	0.9	1.3	"	使用痕なし
	5	—	—	Cj90	盛土	4.7	3.1	0.7	6.9	凝灰岩	
	6	5-9	12-9	De50	I	5.9	3.0	1.3	21.5	ホールンフェルス	
	7	5-12	12-12	Be06	II	7.9	6.4	1.4	97.0	"	石斧欠損品か
	8	5-5	12-5	D区	表採	5.4	4.0	1.9	39.0	珪質頁岩	
刺片石器	1	5-4	12-4	Be03	II	3.3	2.1	0.6	4.2	珪質泥岩	石匙の半製品?
	2	—	—	B区	"	1.8	2.4	0.6	2.5	泥岩	使用痕
	3	5-6	12-6	"	"	1.9	3.3	1.4	6.75	珪質泥岩	
	4	5-2	12-2	"	"	1.7	1.9	0.3	1.1	タンバク石	
	5	5-7	12-7	"	"	3.0	3.2	0.6	6.5	珪質泥岩	
	6	—	—	Be56	"	3.4	4.1	2.9	15.7	石英(礫石)	
	7	5-3	12-3	Bf56	"	1.8	2.2	0.5	1.75	タンバク石	
	8	—	—	"	"	4.7	2.7	2.0	19.5	黒曜石	
	9	5-10	12-10	Bj53		2.6	3.5	0.7	6.4	硬質頁岩	



①KT178Be56構上部 石製品

第5図 石製品

1~4・6・8 S=1/2 他はS=1/3

時期区分等問題を有する石器である。

剥片石器 (総数 9 点、図示 5 点)

1)は上端に使用による抉り込みが見られる。他部の使用痕は明瞭ではない。上端部には柄成型の為かと思われる調整を施しかけた痕がある。 3)は上部に自然面が残っている。横型で先端部は折れている。使用痕は自然面の残っている側辺先端に見られる。 4)は爪状の小剥片でほぼ全周にわたり使用痕が見られるが円形辺部に明瞭なもの残っている。 5)は先端部を除いて使用痕が認められるが特に抉り込みによるものがある。断面は側線よりはずれた部分にて一方がより外面に膨らみ、下端はより薄くなる。 7)は蛋白石製で上端肥厚部を除いて使用痕が見られる。部分的に調整を施し、石鏃等の製作を意図したようにも見られる。 9)は先端部及び柄部と思われる所が欠損している。先端部に連なる2側縁には使用痕が認められる。

口. 古代以降の遺物 (第6図、第3表)

須恵器

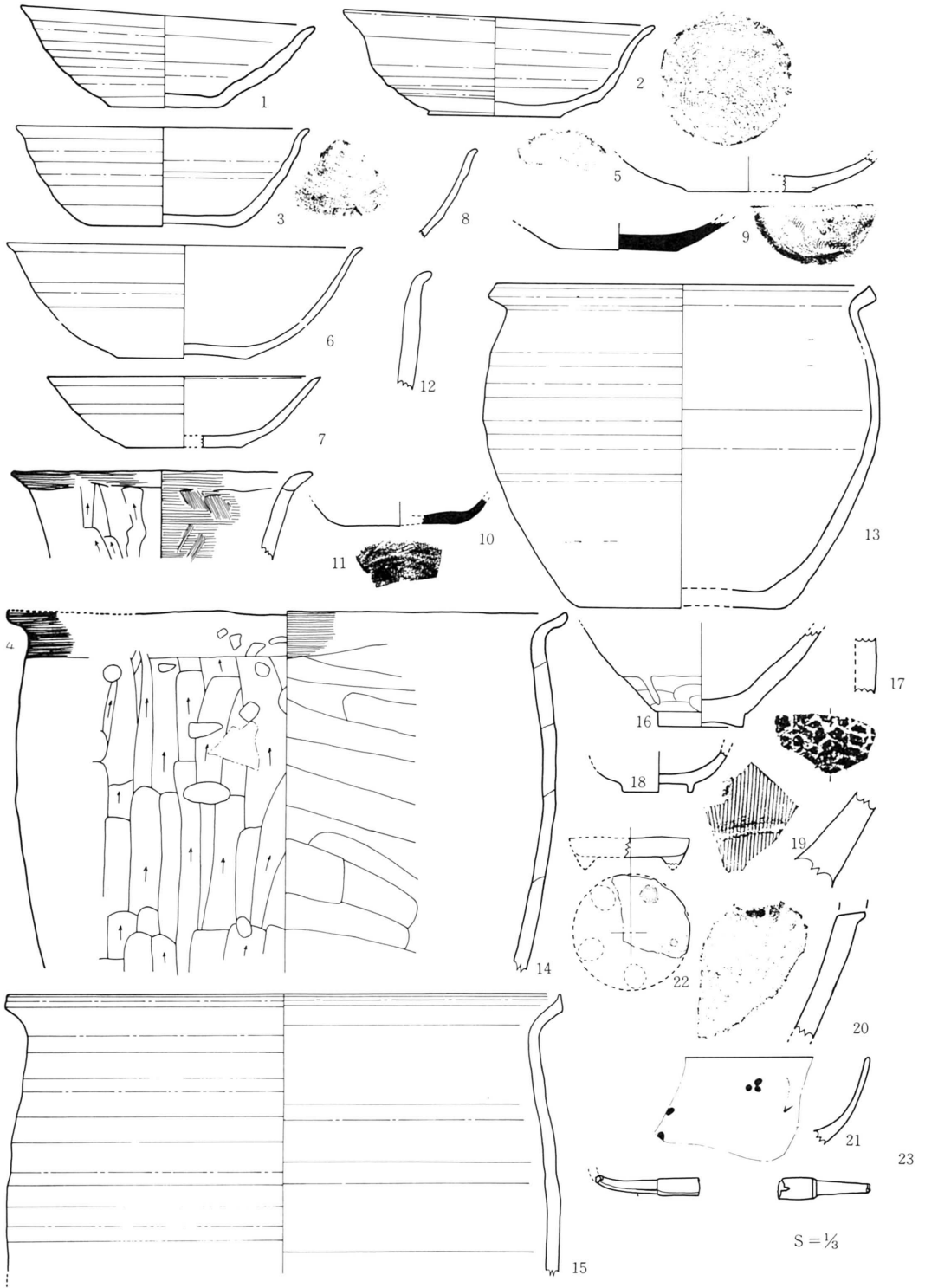
出土位置が南北大溝の周辺のみ集中する。ある意味ではこの溝にともなう遺物と見る必要もあり、個々については溝の出土物として後述するのでここでは項目のみにとどめる。

土師器

南北大溝の周辺に多い訳であるが、他の遺構にも出土し又その周辺にもあるのでそれぞれの遺構との関連が考えられる。

(坏) 1)は厚手で底径が小さい。形が歪み器高は中間的な値を示す。 2)は薄手な作りであ

第3表	図番号	写真番号	出土位置	法量 (cm)			口縁部 形態	底部 形態	成形 技法	底部切 離技法	胎土 含有物	調整		焼成	備考(川は推定)			
				口径	底径	器高						外 面	内 面			炎 否	良 否	
土 師 器	1	6-1	13-1	Dd621 L.	13.6	5.0 (4.4)	外傾	平底	ロクロ	回転糸切	細礫 粗	底部の一部	ロクロ	酸化	普	赤焼き 器形にひび ひび、引き紙 (朱塗?)		
	2	6-2	13-2	"	14.5	6.2 (4.5)	外反	平底	"	"	雲母 普	ロクロ	ロクロ	"	"	赤焼き、(朱塗?) (反転固化)		
	3	6-3	13-3	"	(13.6)	(6.6) (4.6)	外反気味	"	"	"	石英 "	"	"	"	"	赤焼き、(朱塗?) (反転固化)		
	4	-	13-4	"	(12.4)		(片口様)	-	"	-	"	"	"	"	"	"	赤焼き、器川、墨 書?	
	5	-	-	"	(13.8)	(7.4) (4.2)	外反気味 (-)	"	"	-	細砂 "	"	"	"	"	"	赤焼き	
	6	6-5	13-5	DE59		(5.8)	-	平底	(")	回転糸切	"	"	"	"	"	"	"	赤焼き
	7	6-6	13-6	Ej121L.	(16.4)	5.9 (5.2)	外反気味	"	ロクロ	"	粗砂 粗	"	"	"	"	"	朱塗り? (合成反 転固化)	
	8	6-7	13-7	"	(12.6)	5.3 (3.3)	外傾	"	"	"	細礫 粗	"	"	"	"	"	橙色軟質	
	9	6-8	13-8	"	(14.4)		外反気味	-	"	-	粗砂 粗	"	"	"	"	"	橙色?に類似但し 外反強い	
須恵器 坏	1	6-9	13-9	Bd06	-	5.4	-	平底	"	回転糸切	粘板岩 普	寛削	"	還元	"	"	灰白色 軟質	
	2	6-10	-	De03	-	5.4	-	"	"	"	不明	細砂 普	寛削	"	"	"	灰色 硬質 調整底	
土 師 器	1	6-11	13-11	Ej121 L.	(14.0)		外反	-	非ロクロ	-	細礫 粗	"、撫で	横撫で	酸化	"	"	灰白色 全体的に粗 礫	
	2	6-12	13-12	Eg121 L.	(19.2)		"	-	"	-	"	"、"	"	"	"	"	橙色 全体的に粗 礫	
	3	6-13	13-13	"	(26.0)		"	-	"	-	普	ロクロ、"	横撫で、刷毛目	"	"	"	純黄橙 全体的に粗 礫 巻上げ痕 有り	
	4	6-14	13-14	"	(25.6)	(10.4)	外傾	平底	(ロクロ)	(撫で)	"	ロクロ、"	ロクロ	"	"	"	純橙色 巻上げ痕 有り	
	5	6-15	13-15	"	(17.3)	(9.3) (15.0)	"	"	(")	(糸切)	"	ロクロ、(底有調)	"	"	"	"	炭質物付着	
陶 器	1	6-16	13-16	Be06		(4.0)	-	(ベタ底)	ロクロ	寛削り	極細砂 良	下部削り	-	"	良	天目茶碗、内外鉄 軸		
	2	6-17	13-17	Ba~d	-	-	-	-	-	-	細砂 普	(スタンプ)	(剥離)	"	普	"		
	3	6-18	13-18	Db12	-	(3.2)	-	糸底	ロクロ	(糸切)	"	"	ロクロ	"	"	"	内面に薄く軸様物	
	4	6-19	13-19	De53	-	-	-	-	-	-	細砂 良	ロクロ	放射状溝	"	"	"	外面に鉄軸、重お 焼成?	
磁 器	5	6-20	13-20	Dh03	-	-	-	-	-	-	粗砂 粗	(剥離)	(ロクロ撫で)	"	"	"	露出細片、注ぎ口 縁色	
	6	6-21	13-21	Ej06	(10.5)		直口	-	"	-	細粗 良	ロクロ	ロクロ	還元	"	"	染付(現代)	
	7	6-22	13-22	Bi36	(5.4)	(4.0) (1.5)	-	-	-	-	細礫 粗	-	-	酸化	"	"	粗粒砂多い、空熱 大	



第6図 古代以降の遺物（包含層）

る。見た感じにては器形の歪みはそんなに感じられない。朱様物質が見られるが酸化物かもしれない。墨書は破損部にて判読できない。3)は $\frac{3}{8}$ 位の破片で反転図化してある。全体的には厚手である。4)は $\frac{1}{2}$ の破片である。残存部は縁に段を形成するような加工痕が見られ、非対称形の片口様形態をなす。5)は $\frac{3}{8}$ 位の破片で2)と同様薄手、口縁は開き気味、高台部が剥離した可能性も考えられる。6)は合成反転図化に際しての推定値に問題が残る。胎土が粗ゆえか保存状況は不良、湿地に出土したのもその一因と思われる。7)は赤焼系土師器に類似する。含有物は粗粒であり基質も軟弱である。8)は6)に類似しているが口唇部の外反が強い。

(壺) 1)は小型で口唇部が波打つなど、粗雑な仕上りになっている。2)は1)と同じような仕上りで、後出の3)類似破片である。受熱によるのか、外面から口縁内面にかけ橙色を呈し器胎中程まで同色である。3)の口縁は外反又は水平である。削りは体下部より上部方向に行なわれている。4)はロクロ調整のもので複合口縁的な外部への張り出しと内外に沈線様段が付けられている。巻上げ痕巾は2.0~2.5cmである。炭質様付着物が見られる。5)は底より口縁まで接合する。形態はロクロにより整えられているが、胎土粗で下部程磨耗損傷が激しい。

陶磁器

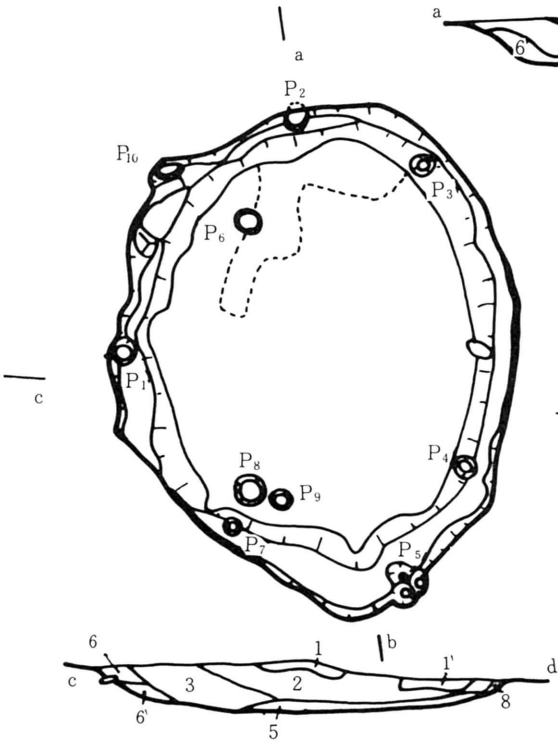
出土点数もそれ程多くなく、現代の使用品も見られる。

1)は鉄釉天目茶碗の底体下部 $\frac{1}{3}$ 程の破片である。底外面は糸底の形をとらないが内部へ幾分の削り込みが見られる。畳付外部は削り取られ段をなす。外面腰部下底までの $\frac{1}{2}$ の所へ釉溜が見られる。釉の基調は赤黒色(Hue2.5YR $\frac{1}{2}$)であるが釉溜りの露胎との境界部は鈍赤褐色(Hue2.5YR $\frac{3}{4}$)に近い色を呈している。この境界部と同様の色調を持つ流下斑点と微細な皺状縞が釉表面に見られる。内面は見込みが広く釉により器内底面は美しい曲線を描いている。釉厚は1mm強、釉溜部は1.5mm位である。胎土は褐灰色(Hue10YR $\frac{6}{10}$)を呈し空隙は見られない位焼き締められている。近隣の柳田遺跡の出土物No.10・24が色々な点で似ているが、産地の特定は出来ない。胎土分析結果について巻末に記しておく。2)は火鉢の体部片と思われる。施釉もなく壁面は軟かい。亀甲模様は明確でない。3)は小型の茶碗で器壁は厚目であるが、高台は全体的に薄く仕上げられている。4)は播鉢底下部で底部の境まで鉄釉様のものがかかっている。放射状の播溝は磨耗していないが、重ね焼き痕と思われる列断と釉溜りが見られる。5)は角鉢の破片かと思われる。6)は磁器片で湯呑み茶碗の一部である。7)は焼台で、三脚を持ち、胎土に砂礫を多く含む。

金属製品

(古銭) 表採された洪武通宝の銅銭で諸元は遺構関連出土物と同一の表に記してある。

(鉄製品) 蹄鉄-Ba50田の代盛土内より出土のもので近くに馬(犬歯部)様遺体が見られた。簀子-Eg15 I層下部よりの出土で、径12.8cm、厚さ6mm 1.4cm角の格子である。千歯扱の歯



土層註記

1. 黒褐色 (10YR 3/2) 腐植土層 (礫土炭化物等少し含む)
- 1'. 黒褐色 (") // 礫だけ含む)
2. " " " (粘土をブロック状に含む)
3. " (10YR 3/4) " (粘土礫 遺物を若干含む)
4. " (" 3/2) " (シルト質(砂質に近い))
5. 黒色 (" 2/1) " (礫シルト、炭化物若干含む)
6. " (" 3/2) " (礫含む、シルト遺物若干含む)
- 6'. " (") " (礫を若干含む)
7. " (") " (砂質シルト質土混入)
8. " (") " (砂礫を多く含む)

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
上端径cm	25×23	25×22	27×22	24×27	26×25	25×27	20×18	35×35	21×24	46×30
下端径cm	16×17	20×25	15×12	14×16	8×8	20×19	10×11	26×25	15×19	40×25
深さ cm	32	32	14	36	33	25	23	27	17	34

第7図 竪穴式住居跡(Dc50)

- E15II層下部よりの出土で長さ15.1cm、巾2.3cm、厚さ0.5cm、楔状の平面形である。

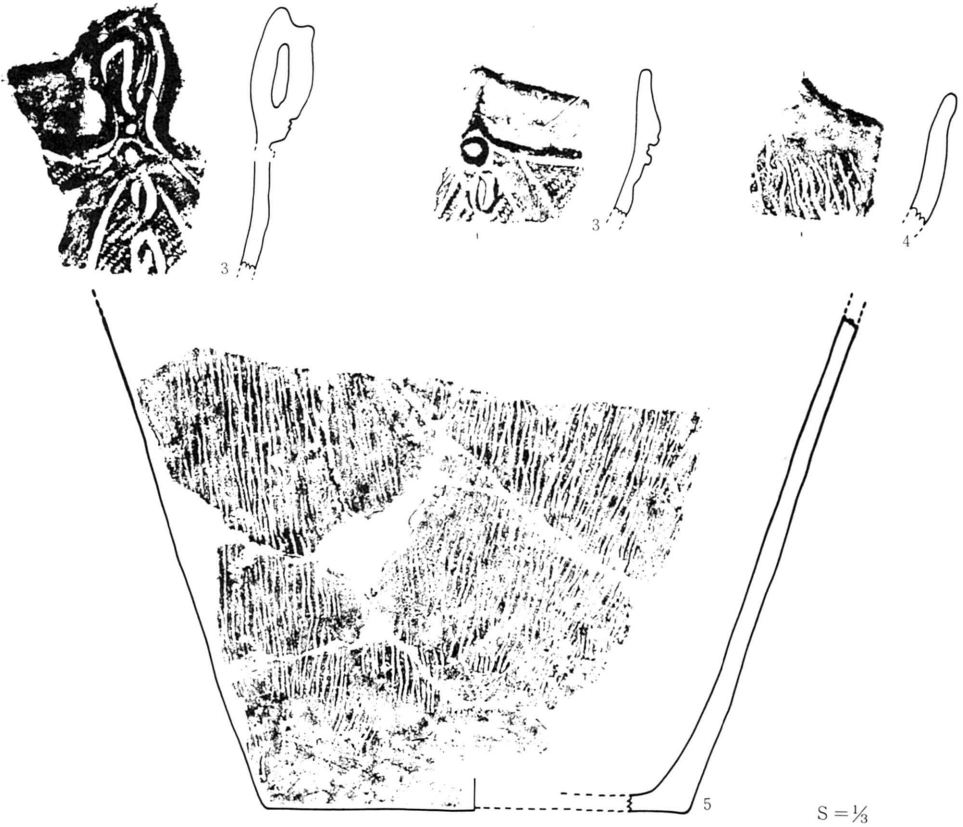
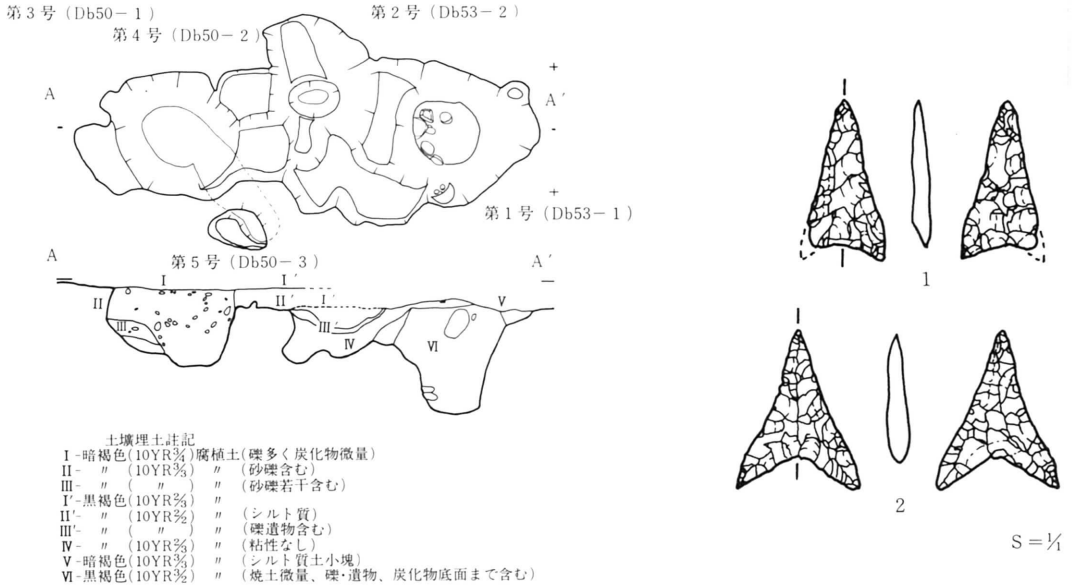
2 縄文時代の遺構と遺物

竪穴式住居跡 (Dc50) (第7図・第4表)

〔遺構〕〔平面形・規模・方位等〕長軸長5.4m、短軸長4.2mのほぼ楕円形を呈する。壁高は約40cmであるが壁は明確に立たず床面に緩傾斜と一段をもつて至る。長軸の方位は北より40°東に偏っている。

〔床面・周溝・柱穴・埋土等〕貼り床とか周溝などは検出出来ず、中央部は砂礫層、南側と北東部は明褐色シルト質土に続く。柱穴様の土壌としては合計10箇所あり、壁の上端と下端の中間点に6、床面の北側に1、西側に2、壁の北側上端に1である。これらの埋土は住居跡埋土

第4表	出土位置	器形	部位	色調	土性	内面(調整等)	外面(調整・施文等)	備考(推定cm)		
(Dc50) 竪穴式住居跡出土物	1	Q ₁ WW Eベルト	鉢	体底	橙 色	砂粒 粗	撫で	横撫で、底(笹葉様敷物痕)	(底径10.4)他に薄手片1あり床面上.55cm	
	2	Q ₂ 2層	"	体部	浅黄橙色	" "	" "	(L-R)施文不明	厚さ0.6cm他に1片	
	3	"	"	"	鈍橙色	細砂多い	粗	木目様捺糸文	2片第1号(Db53-1)土塊2)に類似	
	4	Q ₂ (NO2)	"	"	褐灰色	粗砂	粗	沈線(区画)	第1号(Db53-1)土塊1)に類似	
	5	"(NO1)	环	"	浅黄橙	砂粒	普	ロクロ撫で	磨減片 土師器	
	6	Q ₂ 2層	鉢	"	黒褐色	粗砂	粗	撫で	(L-R)施文不明	O ₂ 2層片と接合O ₂ 3層片と類似
	7	Q ₂ 3層	高合付	体・底	鈍橙色	砂粒	普	内黒処理	高台内瓦撫で	底部径6.6cm 土師器
	8	Q ₄ 床面	鉢	頭部	橙色	" "	" "	横撫で	磨き(剝離)	磨減片
	9	Q ₄ 1・2層	"	体部	"	" "	粗	—	—	磨減片 縄文11片
	10	Q ₄ 3層上部	"	体・底	"	" "	" "	—	—	磨減片 縄文5片 土師1片



第8図 第1号 (Db53-1) ~ 第5号 (Db50-3) 土壤及び出土物

第5表	図版番号	写真版番号	出土位置	器形	部位	色調	土性	内面(調整等)	外面(調整施文等)	備考(推定値・cm)	
縄文片	1	8-3	4-1	第1号(Db53-1)Q ₁	鉢	口縁	灰褐色	雲母石英	磨き良好	耳状把手隆帯区画磨消沈線文	把手部は付て無把手部と交互か(口径24.0)
	2	8-4	4-2	"	Q ₂	"	純赤褐色	"	"	波状口縁(磨きのみ?)網目文1部分	焼結良好波状部下の文様不明
	3	8-5	4-3	"	"	底部	浅黄褐色	"	"	磨き	木葉底、L-Rの細い捺糸文

第6表	番号	図版番号	写真版番号	出土地点	層位	(cm)			重量g	材質	備考
						縦	横	厚さ			
石鏡	1	8-1	4-4	第1号(Db53-1)	VI	2.1	1.1	0.2	0.3	玉	欠損 Q ₁
	2	8-2	4-5	"	VI	2.1	1.6	0.3	0.4	珉質泥岩	ちりめんじわ Q ₁

の6・7層と同一であるが、中には炭化物を含むものもある。

〔遺物〕 縄文片が大半を占め計28片である。後世の攪乱による紛ぎれ込みと見られる3片の土師器の破片もある。縄文片のうち3・4)は他遺構(Db53pit)の出土物と類似性がある。又6)はQ₂層とQ₃層の接合片である。半数以上は磨滅片であり、床面出土の物も同様で唯一のものとはいえ遺構年代確定資料としては不十分なものである。

土壌 (第8図、第5、6表)

前述の遺構の北側に大小合せて5つの土壌が確認されたが出土物等より縄文時代以降のものを含む。

第一号土壌 (Db53-1)

〔遺構〕〔平面形・規模等〕 検出面にては不整形であるが下部程円形に近い。他の土壌と近接しており平面形の境界はとらえにくい。上端東西長約1.30m、南北長約1.0m、中端は0.85m・0.75m、下端は0.52m・0.50mとなる。深さは0.95mである。検出面上の土器片は黒斑を有する体部であるが接合関係にない。

〔埋土〕 黒褐色腐植土が大半であるが9層に細分出来る。その内の6層が大半を占め、前述の土器片の他に炭化物・焼土・礫等を多く含む。

〔遺物〕 2)は口縁部小破片である。波状口縁部の一部であるが磨きのみと思われる。3)は底部部接合出来た破片で細い捺糸文を施こしてある。胎土等の色調は2)とは異なるが同一個体の可能性もある。1)は耳状の把手様装飾の施された口縁片である。波状口縁のみの装飾をもつものも同時に出土しており、耳状の装飾部と交互又は、ある間隔を持って配置された同一個体と思われる。石鏡は完形品1・欠損品1がそれぞれ出土している。

第二号土壌 (Db53-2)

〔遺構〕〔平面形・規模等〕 上端は第4号(Db50-2)と西側において接し不整形で、中端は北側が球状をなす南北方向に長い円、下端は中端球状部がそのまま直下した円形となっている。上端径の最長部1.0m、中端長軸長0.8m・短軸約0.3m、下端長軸0.25m・短軸0.10mである。深さは上・中端間0.40m、中下端間0.10mである。

〔埋土〕 第1号と異なり暗褐色土が大半を占め、礫も多く含む。

第3号土壌 (Db50-1)

〔遺構〕〔平面形・規模〕第4号 (Db50-2) と接し、第2号 (Db53-2) と連らなる。上端はほぼ円形を呈する。下端は中央の円形部が南東方向へ延び第5号 (Db50-3) とつながる。上端径約1m、下端径約0.5m、下端奥行0.85m、深さ約0.65mである。

第4号土壌 (Db50-2)

〔遺構〕〔平面形・規模〕前述の通り、2つの土壌の中間にある。平面形は8字形に近く、二段階に底面を形成している。一段目径約0.4m、二段目約0.5mで深さはそれぞれ0.1mである。

第5号土壌 (Db50-3)

〔遺構〕〔平面形・規模〕上端は半円形で、中端に平坦面を持つ、下端は第3号 (Db50-1) につながる。上端径約0.4m、深さは約0.5mである。

以上の土壌の重複関係は不明である。土壌の形状・埋土状況等より第4号 (Db50-2) が一番新しく、第1号 (Db53-1) より第2号 (Db53-2) が新しく、第2号と3号 (Db50-1) では第3号が新しいことも考えられる。これらの時間間隔・機能についても不明な点が多い。

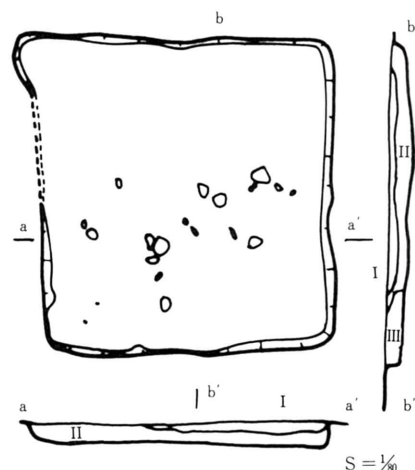
3 古代以降の遺構と遺物

1) 竪穴式住居跡

第1号 (Bb06) 住居跡 (第9図、第7表)

〔遺構〕〔平面形・規模・カマド・方位〕一辺約3mの方形であり深さは約22cmの残存を見せている。カマドや炉の施設は認められないが、薄い焼土の広がり西壁側の中央寄りの床面上に見られた。壁はほぼ東西南北に面している。

〔床面・周溝・柱穴・埋土〕前述のごとく明確な施設は見られない。この竪穴は東・南側では黒色土に掘り込まれ、埋土の黒褐色土にシルト質土が細かい塊で混在する。



第9図 第1号 (Bb06) 住居跡

〔遺物〕埋土北部には縄文片が含まれ床面上にまで見られる。これは遺構外南側包含層に密度の濃い部分があり構築時のまぎれ込みや廃棄後の流れ込みと思われる。表に示すごとく土師器が大半で遺構外の出土物と接合するものもある。須恵器は1片のみである。7)は内黒の土師器坏で、土師器甕には肩部に段や叩目を持つものがある。

- I—黒褐色 (Hue 5YR%) 腐植土層 シルト質若干、炭化物若干、遺物含む
- II— " (Hue 7.5YR%) 腐植土層 シルト質増す、炭化物、焼土塊若干、遺物含む
- III—暗褐色 (Hue 7.5YR%) 腐植・シルト質層 炭化物若干含む

第7表	出土位置	器形	部位	色調	土性	内面(調整等)	外面(調整・施文等)	備考(推定cm)
第1号 (Bb06) 住居跡出土物	1	Q ₁	鉢	体部	—	—	地文L-R	縄文11種、隆帯刺突片あり、雲母含むものあり
	6	"	坏	口・体	鈍橙色	砂粒含 普	ロクロ	土師器、口唇外反1種7片
	10	"	甕	体部	—	—	—	" 磨耗片6種
	7	Q ₂	坏	"	鈍橙色	砂粒含 普	内黒処理	ロクロ " 2種4片
	11	"	甕	体・底	—	—	—	土師器3種3片
	12	"	"	体部	褐灰色	細砂 普	撫で	叩目(痕跡) 須恵器1片 厚さ0.7cm
	2	"	鉢	"	—	—	—	縄文 磨耗片9種
	3	Q ₃	"	"	—	—	—	" (L-Rもあり) " 6種
	8	"	坏	口縁	鈍橙色	雲母含 精	内黒処理	ロクロ 土師器1片 細粒雲母片
	13	"	甕	体部	—	—	—	" 5種8片
	9	Q ₄	坏	口縁	鈍橙色	砂粒含 普	ロクロ	ロクロ " 外反気味
	14	"	甕	肩部	"	"	刷毛目	削り(肩部有段) " 1片
	4	土層断面中	鉢	体部	—	—	—	縄文 磨耗片3種
	15	"	甕	"	—	粗砂 粗	刷毛目	叩目削り 土師器1種3片
	5	床面上	鉢	"	—	—	—	縄文(L-ト, L-R) 2種
	16	"	甕	"	浅黄橙色	粗砂 普	撫で	削り(叩目も) 土師器2種

第2号 (Ch62) 住居跡 (第10図)

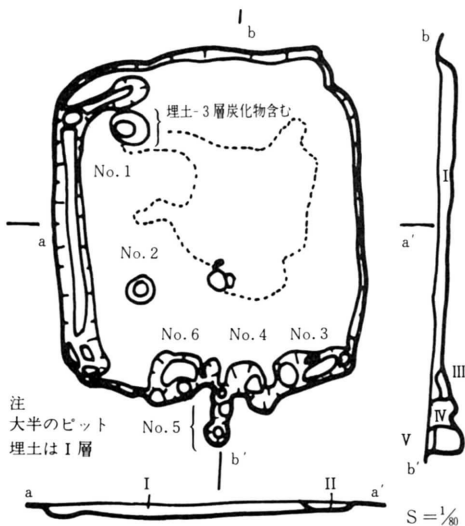
〔遺構〕〔平面形・規模・カマド・方位〕一辺3.60mの方形である。残存壁高は0.1m内外ではほぼ垂直に立ち上がる。中央やや南寄りに炉と思われる石組と焼土が検出されたが、焼土は0.5～1cmの薄さで、石の受熱による変色も著しくない。但し周囲には炭が散在している。

〔床面・周溝・柱穴・埋土〕貼り床等形跡は認められない。中央部及び北壁際に地山礫が露出する。西壁際から北壁際にかけて周溝状様施設が認められる。柱穴と思われる土壌は3ヶ所あり図の1)～3)である。他の土壌は他の施設のものと思われる。埋土は1層でシルト質土と腐植質土の混合層で、固められたように堅く締っていた。

〔その他の施設〕前述以外の土壌は3ヶ所である。4)は南壁をえぐる様に設けられている。5)は外側に3基連続して張り出している。全体的な配置からこの位置にはカマド等が設けられるのであるが前述の通りで、カマドを壊した痕跡すら認められない。いずれにしてもこれらの土壌の性格は明確に出来ない。作業仮説としては他の掘立柱の1つと考えられるものもある。

〔遺物〕鉄製品が2点出土した。1点は3)土壌に近い床面よりの刀子様鉄製品である。刃部と思われるが、厚く角鈎様でもある。3)土壌の北壁に貼り付いた形で鉄板様の出土物があるが、銹化によりその実体は不明である。

以上の事より明確な年代は不明であって今後の検討をまたねばならない。



第10図 第2号 (Ch62) 住居跡

- I—暗褐色 (7.5YR_{5/2}) 腐植・シルト質層 (炭化物焼土若干含む)
- II—褐色 (7.5YR_{5/2}) シルト質腐植土層 (炭化物若干含む、硬い)
- III— " (") シルト質土 (礫含む人為的埋土)
- IV—極暗褐色 (7.5YR_{1/1}) 腐植・シルト質層 (炭化物・焼土若干含む)
- V—褐色 (7.5YR_{5/2}) シルト質腐植土層 (")

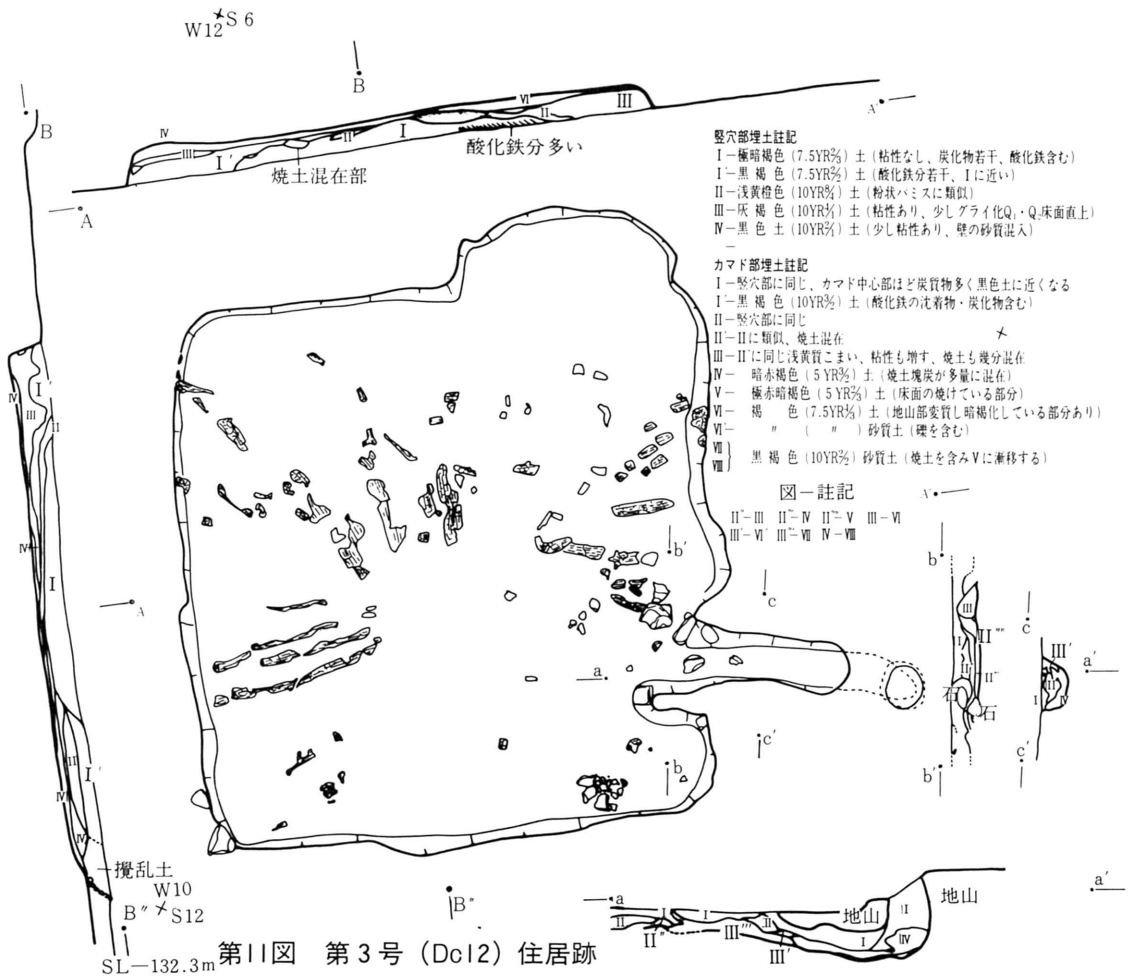
第3号(Dc12)住居跡(第11図・第8表・第12図・写真6図)

〔遺構〕〔平面形・規模・カマド・方位〕一辺約3.60mの方形であるが、北壁東隅近くに長さ1.6m、奥行0.5mの張り出しがあり底面は幾分外側に高くなっている。残存壁高は約0.20m内外で、煙出し検出面高より推定される壁高は0.40m以上である。カマドは東壁南隅近くに設けられている。袖は石及び土器を芯としてシルト質土にて構築されている。支脚の石は東壁の線上に据えられてある。煙道は線抜き式で長さ1.40m、径0.18mである。煙道は煙出し部へと下降している。煙出し部に土師器甕体部が出土したが補強の為に使用されたと考えられる。北東隅の張り出しまで含めた長辺の方位はN12°Wである。

〔床面・周溝・柱穴・埋土〕床面には、貼床・周溝・柱穴等の施設は見られない。南壁は礫質である。床面には土師器等の他に炭化材が多く埋積している。炭化材は、住居跡の中心に向かい放射状に倒れ込んでいる。北東隅及び西壁北隅近くには壁に沿って立っているものもある。炭化材上に地山質土(一見粉状パミス様の砂質土)が薄く介在するが東壁側はより厚い。埋土は全般的に極暗褐色を呈し、水の作用による酸化物を幾分含む。

〔遺物〕完形での出土品はない。土器で口縁部より底部まで接合する破片でも、まとめて出土するものは少ない。床面にかなりの酸化鉄沈着現象が見られたが鉄製品は確認出来ない。土師器：環 1)は底部から口縁部まで一応まとめて出土した。表面に酸化鉄の付着物がある。碗形の½片で反転図化してある。2)・3)は同一個体と思われるもので、体部の立ち上り具合や、胎土及び内面の同心円状の凹み等酷似している。体部の立ち上がりかゆるく環形である。4)は内黒の小破片である。他に内黒片は見い出せない。 : 甕 1)はカマド袖南側より出土した底部から口縁まで接合するものであるが、カマド焼土中の口縁片が接合した。全体的に赤

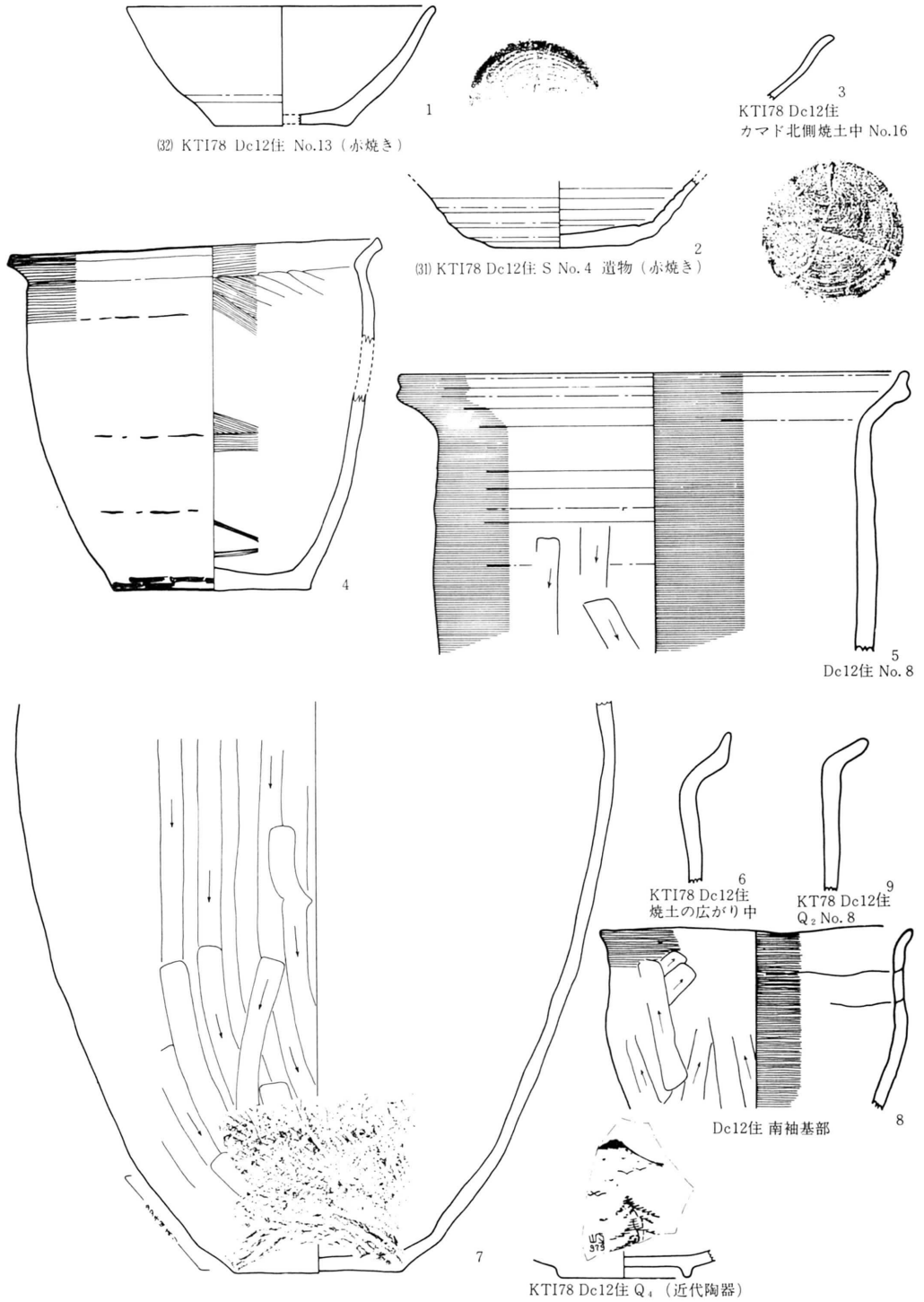
第8表	図 番号	写真 番号	出土 位置	法 量 cm			口縁部 形態	底部 形態	成形 技法	底部切 離技法	胎 土 含有物	調 整		焼 成		備 考								
				口径	底径	器高						外 面	内 面	炎	良否									
第3号(Dc12)住居跡出土物	環	1	12-1	6-1	床 面	(13.8)	(5.9)	(5.3)	外 傾	平底	ロクロ	回転未切	普	ロクロ	ロクロ	酸化	普	赤焼き?, 体部立ち上がり大						
		2	12-2	6-2	"		6.4	(5.5)		"	"	"	粗砂	"	"	"	"	"	"	内面に同心円模様				
		3	12-3	6-3	カマド北焼土	(15.0)			外 反	-	"	-	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
		4	-	-	Q ₁	(13.2)			"	-	"	-	細砂	"	"	内黒処理	"	"	"	"	石英目立つ、内黒は他にも1片			
	土 師 器	甕	1	12-4	6-4	床面Q ₃	16.7	8.8	15.4	外 傾	平底	(ロクロ)	磨 耗	細礫	"	"	斜撫上げ	"	"	"	"	積上げ痕(カマド焼土内)		
			2	12-5	6-5	" 袖北	(23.0)	-	-	複 合	-	(ロクロ)	-	粗砂	ロクロ削り	ロクロ	"	"	"	"	"	口縁部段明確、煙出し出土物類似		
			3	12-6	6-6	焼土中	(20.4)	-	-	"	-	(ロクロ)	-	石英	"	"	"	"	"	"	"	直口気味、頸部折曲り大		
			4	12-7	6-7	床 面		(7.4)		-	平底	(磨き)	細礫	"	削り・叩目	撫上げ	"	"	"	"	"	"	薄手硬質、3)の胎土類似	
		5	12-8	6-8	袖基部	(14.0)	-	-	外反気味	-	-	-	礫	"	"	"	撫で	横撫で	"	"	"	歪み大、片口様でもある		
		6	12-9	6-9	Q ₂	(不能)	-	-	(外傾)		(ロクロ)	-	砂	"	"	"	"	"	"	"	"	幾分軟質、4)の胎土類似		
甕	7	-	6-10	床 面	(20.4)			複 合	-	(ロクロ)	-	"	粗	ロクロ撫で	"	"	"	"	"	"	幾分粗雑			
	8	-	-	"	-	-	-	-	-	-	-	雲母 普	磨 き	剥 離	"	"	"	"	"	"	溝出土物に類似			



橙色を呈している。2)はカマド袖側の床面に貼り付いた形で出土した。類似片は、前述の煙出し壁近くに出土したものである。ロクロによる口縁部調整を行なっているが、厚ぼったく調整がなされ幾分古い時代の形態をしている。4)は底部より頸部近くまで接合した破片であるが、体部片は煙道より出土したものである。叩目が底部近くに残存しており、底体の境は明確でない。推定反転図化したもので、実際の底径及び胴径は図化値より幾分小さな細身の器形であるかもしれない。この4)の類似口縁片は3)と6)があるが特定は出来ない。5)は壁とカマド袖の境(基部)に貼り付いた形で出土したもののだが2)同様仕上げが粗末であり、出土状況との関係より住居に生活した人間が用器として使用したとは考え難たい。

この他の出土物として縄文片がある。この縄文片は南東部埋土よりの出土で、地文のR-L上に横位の沈線が一本施こされている。住居廃棄後の埋入物と判断される。

炭化材の材質については節や炭化の具合より栗材であると鑑定結果が出ている。又 ¹⁴C測定による年代は1170±60y.B.P.(1130±55y.B.P.)という結果が出ている。



第12図 第3号 (Dc12) 住居跡・出土遺物

第4号 (Ej15) 住居跡 (第13図、第9表、写真7図)

〔遺構〕〔平面形・規模・カマド・方位〕用地の事情にて半掘形であるが、南北長5m、東西長4m、壁高は0.20mである。カマドは東方壁中央よりやや南に構築されている。焼き口部には焼土と多くの石が散在している。袖は川原石を立て芯にし、上をシルト質土にて被い構築している。カマド基部と煙出し部に於いて繰抜き構造が認められる。カマド方位はN72°Eである。煙道は焼き口と煙出し中央を結ぶ線より幾分北に振れている。煙道と煙出し底はほぼ水平である。尚本遺構の検出位置はEi15であるが記載上Ej15としてある。

〔床面・周構・柱穴・埋土〕床面は粘質土で水はけは不良であるが周溝等の施設は検出出来なかった。北半の床面には炭化材が散乱している。この炭化材は柱または梁材と考えられるが、柱穴は検出出来なかった。埋土はカマド部を除いて2層である。上層は黒色腐植粘性土で下層はそれに地山成分を幾分含みほぼ水平に堆積している。カマド燃焼部埋土は上記の他に焼土混在層と焼土層である。

〔その他施設〕東壁北側隅には貯蔵穴様土壇がある。この中には炭化材数個と甕の破片が数片埋積していた。カマド南袖のすぐそばには同様の土壇があり、数片の土器片が埋入していた。この土壇の南側は、南壁の張り出し部となるが、入口としての機能を有したものだろうか。

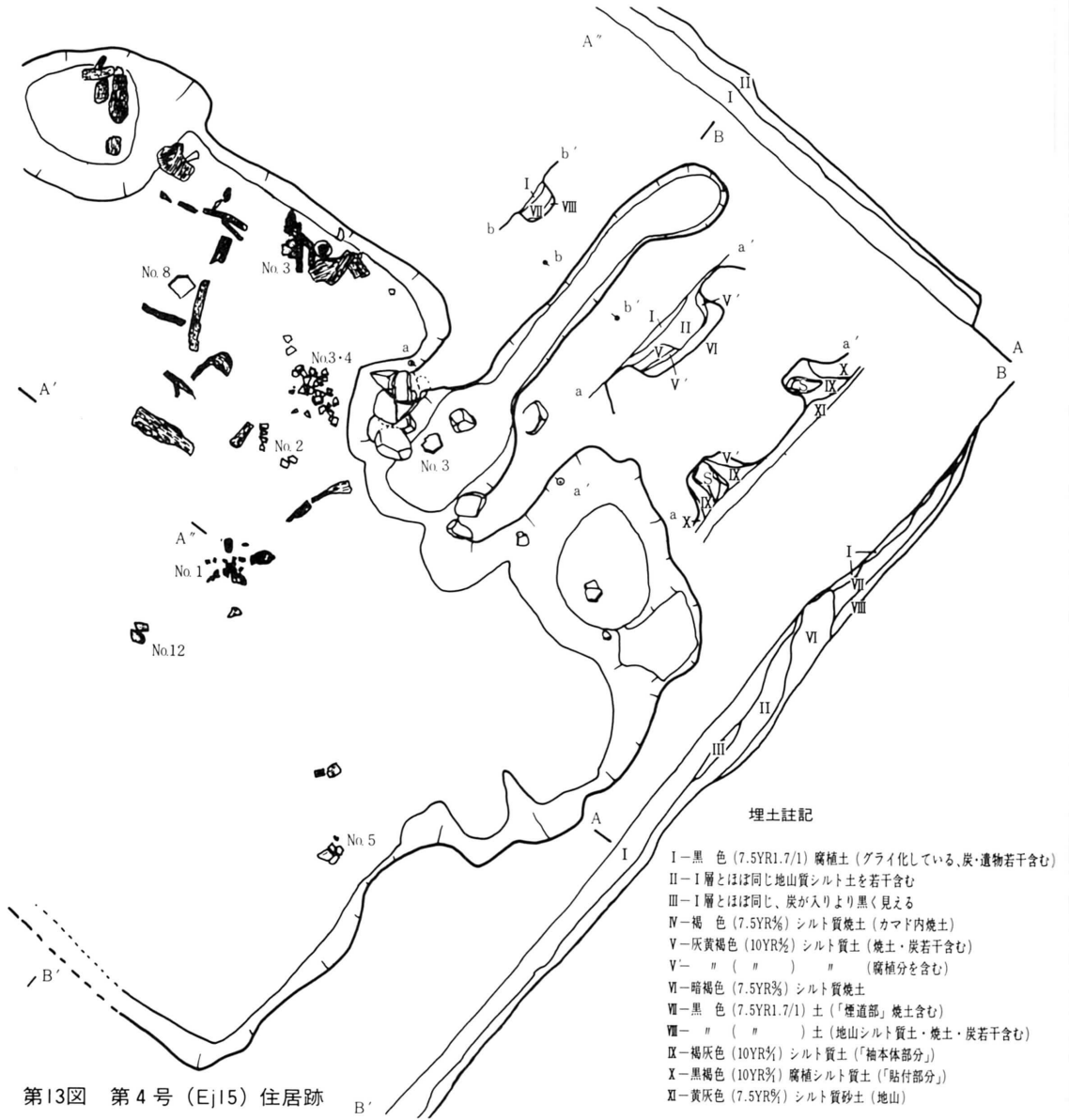
〔遺物〕床面出土物でも東方、住居跡外の包含層出土物と接合するものがある。(第14図)

土師器：杯 1)はほぼ完形に復元出来た物である。実際は全体的に歪んでいる。片口様形態に近いと見る事も出来る。外面底部から口縁部にかけて墨痕と思われる部分がある。字の上に墨を塗り重ねて沫消したものか黒斑なのか不明である。2)は口縁部 $\frac{1}{2}$ を反転図化してある。口唇部の1部を僅かに窪ませ、片口として機能するように成型されたとと思われる。墨書痕も認められる。3)は遺構外遺物と接合するが、土壇出土外反口縁部と同一個体と思われる。

：甕 1)は $\frac{1}{2}$ 程残存した物で、カマド周辺よりの出土である。弱く外反する口縁で、礫等含む土性上か、積上げ痕が剥離痕になっている。黒斑様の変色部が内外にある。調整等粗雑である。2)の形態は1)と同様整うが、調整等粗雑な遺物である。媒様付着物は底内部と口縁部内外に僅かに認められる。3)は床面南西部分に出土した。断口及び内面に炭質物が付着している。内彎口縁を有する。4)は小型で、口縁外面に横位沈線を施してある。5)は大型で、遺構外東方出土の2個体と同等の大きさである。

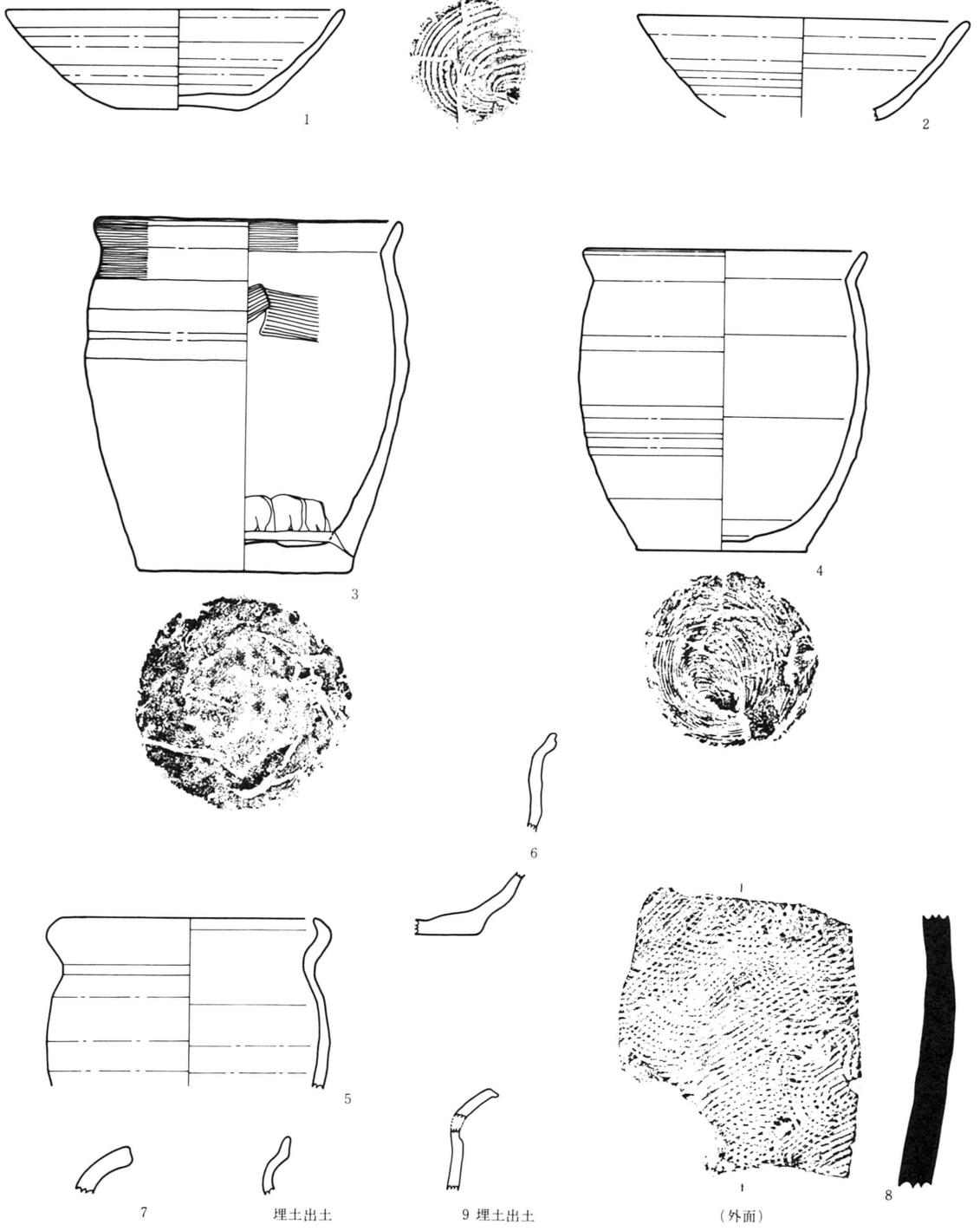
須恵器：甕 図示(8)と(12)の2種4片で、(8)は砂質が強い、又打工具痕と自然釉が認められる。(12)は削りと撫で痕が認められる。

炭化材はタモやミズキと種不明の針葉樹である。 ^{14}C 測定によれば $1200 \pm 75\text{yB.P.}$ ($1160 \pm 75\text{yB.P.}$)と結果が出ている。



第13図 第4号 (Ej15) 住居跡

第9表	図番号	写真番号	出土位置	法量 cm			口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整		焼成		備考					
				口径	底径	器高						外面	内面	炎	良否						
第4号 (Ej15) 住居跡出土物	土	環	1	14-1	7-1	床面中央	13.6	5.0	4.0	外傾	平底	ロクロ	回転未切	砂粒	普	ロクロ	ロクロ	酸化	普	(赤焼き?) 墨書痕、不整形	
			2	14-2	7-2	第1号土塊	13.3	—	—	"	—	"	—	"	"	"	"	"	"	"	1) に相似
			3	—	7-10	床面		5.2			平底	"	回転未切	石英	"	"	"	"	"	"	赤焼き砂質、Ej12Gと接合
			4	—	—	"		(5.8)			"	"	"	"	粗	"	"	"	"	"	砂質、ゆがみ、1) に相似
			5	14-3	7-3	カマド中	12.4	8.4	14.2	外反	"	(ロクロ)	不明	細礫	撫で・削り	横撫で・刷毛目	"	"	"	"	胎土調整粗雑、器形整う
	器	襷	1	14-4	7-4	床面	11.5	6.8	12.1	外反気味	"	ロクロ	回転未切	"	"	ロクロ	ロクロ	"	"	底内面に煤様付着物	
			2	14-5	7-5	"	10.1	—	—	内彎	—	—	石英	"	"	"	"	"	"	炭質物附着	
			3	14-6	7-6	"	11.2	5.0	—	(複合)	平底	"	不明	"	普	"	"	"	"	"	
			4	14-7	7-7	"	(20.0)	—	—	複合	—	(ロクロ)	—	細礫	"	"	撫で・刷毛目	"	"	煤様付着物	
			5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—



第14图 第4号 (Ej15) 住居跡出土遺物

2) 竪穴状遺構 (第15図 写真7・8図)

(Ca62) 竪穴状遺構

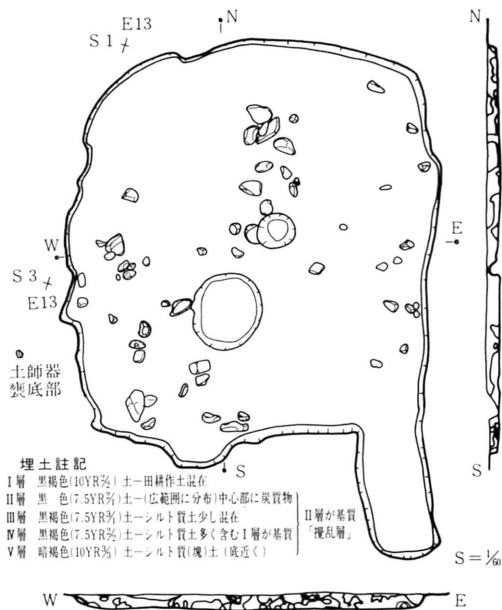
〔遺構〕〔平面形・規模・その他〕輪郭が不整形をなす、一边は約3.0m、南壁は新しい時代の小溝によって切られている。残存壁高は約12cmである。南東隅には張り出しを有するが、カマド及び煙道と見る事は難しい。埋土には礫が多く混在し、図のごとく細分出来るが黒色土の攪乱層と考えられる。中央南寄りの盤状の窪みは少量の焼土と炭を含む黒色土が埋入した浅いものである。(図示を省略したがこの遺構の南側及び東側は低く、特に南側は段状になっている。又南東隅に続く形で黒色土の落込みがあり、段状部が遺構側に削り込まれている。この落込みの南側は検出地山へと漸時薄くなり途切れ、削平等の経過が考えられる。更に南側にはCa62溝が東西方向に走っている。) 出土遺物は底面直上よりの土師器甕肩部と埋土よりの古銭である。土師片の断面より肩部有段、胴張りの器形が推定できる。外面篋撫で、削り、内面刷毛目の調整が施されている。遺構西壁の直ぐ外側には土師器甕木葉底片が出土している。

(Cd68) 竪穴状遺構

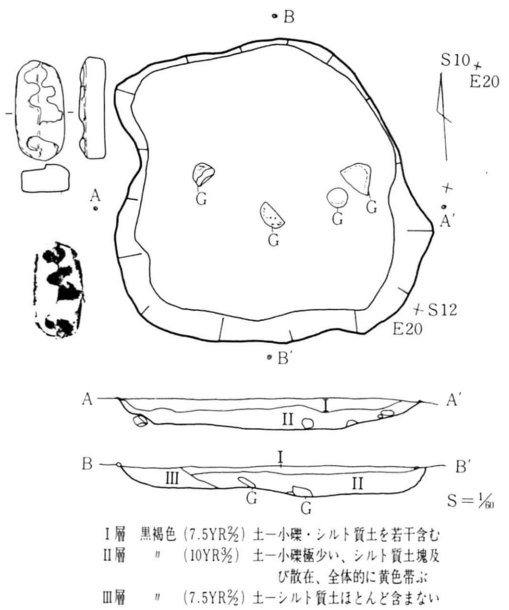
〔遺構〕〔平面形・規模・その他〕不整形形で各辺は方位に平行の2m強の長さ、深さは約0.2mである。断面は皿状に近い。埋土は3層で底部に礫が混在している。特に他の施設はない。

〔遺物〕埋土より磨滅した土師片が2点出土した。又スタンプ様土製品も出土している。

3) 焼土遺構 (第16図、写真8～10図)

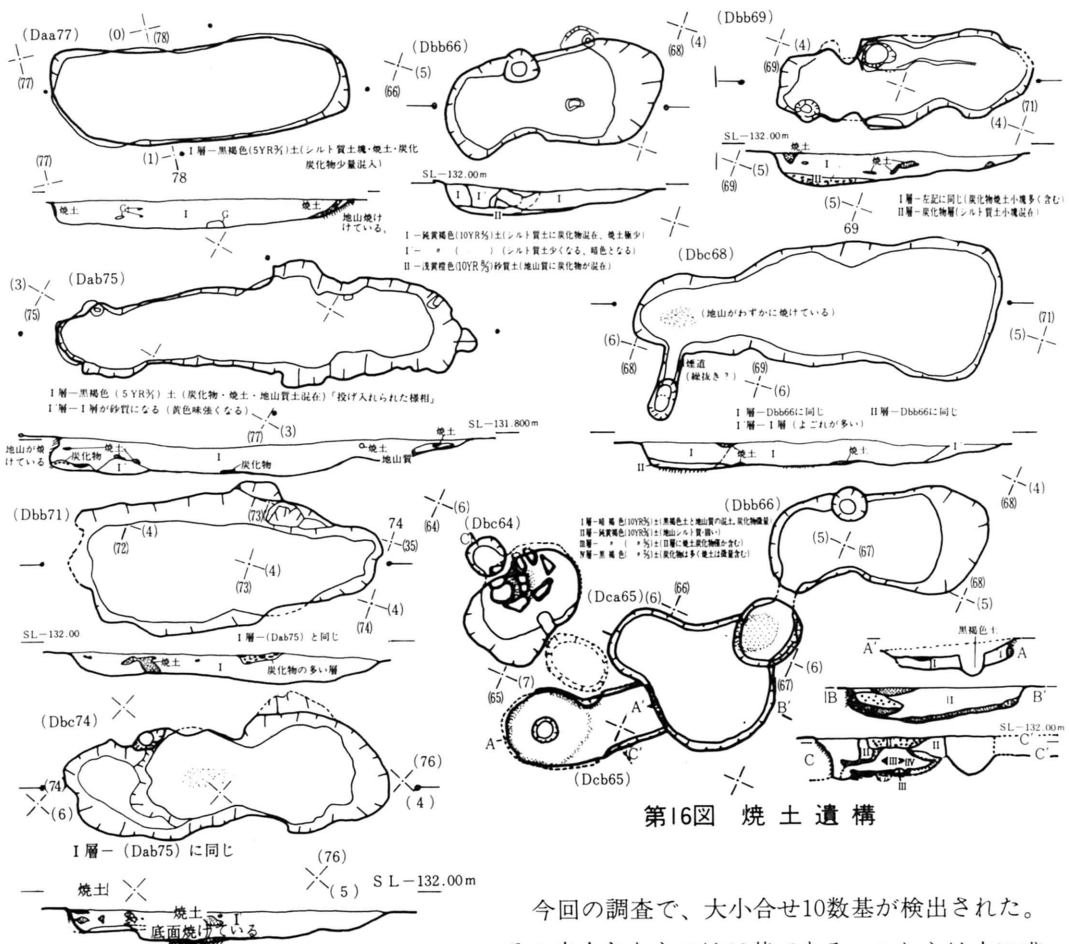


Ca62竪穴状遺構



Cd68竪穴状遺構

第15図



第16図 焼土遺構

今回の調査で、大小合せ10数基が検出された。その内大きなものは10基である。これらは水田盛

土下基本層序第4層の黄橙色土にて検出されている。

(Cbc64) 焼土遺構

〔遺構〕〔平面形・規模・その他〕長軸が94cm、短軸が64cmの楕円に近い形で、深さ約30cmである。短軸方向の西側に煙出し様の土壇をともなう。東西・北側の壁面が強く焼け、赤橙色を呈する。東側の壁は天井様に張り出している。煙出し様土壇とは線抜き式で連続し、平らな石が敷き詰められた底部も良く焼けている。(尚、遺物は出土していない)

(Daa77) 焼土遺構他 (Dab75, bb66・69・71, bc68・74, ca65, cb65) (第16図)

(Dbc64)遺構と同じように煙出部を持つものは(Dbb66)遺構と(Dbc68)遺構である。断面形はいずれも最奥部に向って下り、中央部はやや平坦である。最奥部は西側で、幾分の丸味を持ち上部に立ち上がるか、袋状天井の張り出しを持つ。残存部の深さは25cm内外である。埋土は焼土塊・炭化物等を含む暗褐色又は黒褐色土である。中央部から奥にかけての底部及び壁面は焼けており、炭化物も多い。出土物は二遺構よりの土師小片が2点のみである。

以上述べた状況よりこれらの遺構はカマド或いは窯として機能した可能性が考えられる。類似の例としては同町内柳田遺跡や県外では宮城県白石市松田遺跡の平安時代遺構がある。

4) 溝状遺構 (第17・18図、第10表、写真14~16図)

(Ag53) 溝

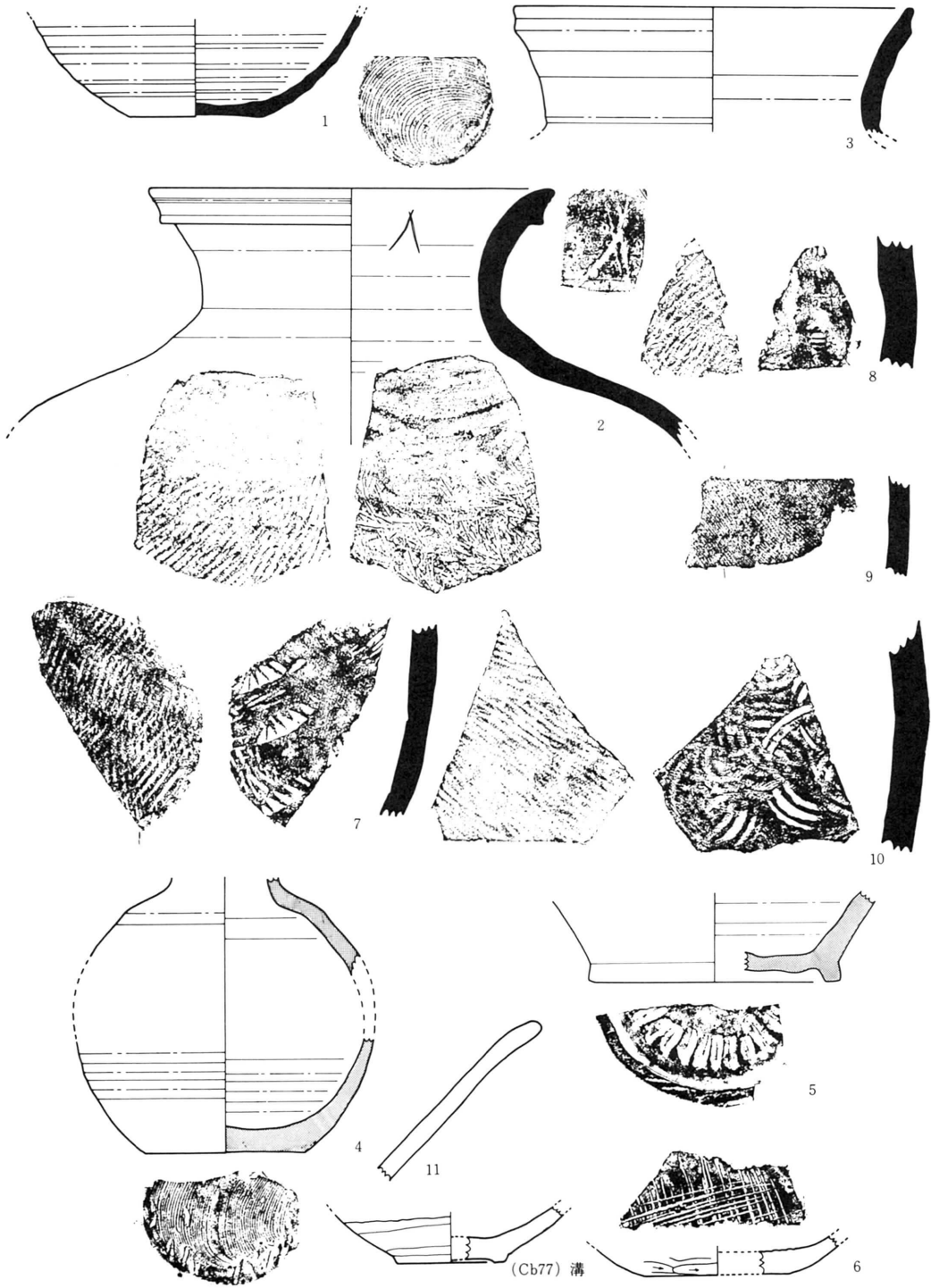
〔遺構〕〔規模・埋土・その他〕長さ約50m、巾0.60m、深さ0.1m内外のほぼ南北に走る溝である。(Ba03) 溝の東側をほぼ平行に走るが検出標高は北端ほど低い。埋土は溝の中央に腐植質が偏在する。底部側部とも地山に漸移する。この溝は(Cb77) 溝の上面をかすめる様に切り、現用水路と交わる形で伸びたと考えられる。(Cb77) 溝との接点には西方より延びる2条の小溝が、又この小溝の延長方向には(Cc62) 溝がある。埋土には土師器数片が含まれている。

(Ba03) 溝

〔遺構〕〔規模・埋土・その他〕長さ約50m、巾最大約4m最小約1m、深さ約40cm、ほぼ南北に流れる現用水路に沿って延びる。南側Ce77付近で巾広く、小溝と重複する。埋土より小溝の方が新しいと考えられる。現用水路はCe80付近で東に方向を転じるが、この溝はほぼ直線的に南下し調査範囲外に延びる。埋土は上部より、開田工事による層、旧表土直下の層、砂質の水路底層(北部ほど厚い)、グライ化層で構成されている。地表の凹地に見られる黒色土は南側の巾広い部分にては中間層としてある。人為的に掘込まれた感じのもので、地山の傾斜に沿った形で存在する。Ce77付近の巾が広い所は水場として機能した可能性も考えられる。他の溝との関係は標高等より特に考えられない。

〔遺物〕南側の黒色土下、砂質部に多く、縄文片は黒色土(旧表土直下の層)に、土師・須恵片は砂質部に偏在している。2)は溝を被っていた包含層よりの出土で、明確に複合口縁が引き出されている。自然釉の部分は水による変質作用を受けてかオリーブ色(黄~灰)を呈している。その他の部分は内外とも灰赤色(2.5YR $\frac{5}{2}$)を呈している。内面には笹葉様当工具痕が見られる。器壁は肩部にかけて薄い、それ以下は不明である。断口は褐灰色(10YR $\frac{6}{1}$)で焼締まった状態である。3)は $\frac{1}{2}$ 口縁片で、複合部はそれ程強調されていない。釉様の付着物は2)と同様変質し、口唇部5mm下より内頸部まで付着している。外面及び断口は2)の断口と同色で

第10表	図 番号	写真 番号	出土 位置	法 量 cm			口縁部 形態	底部 形態	成形 技法	底部切 離技法	胎土 含有物	調 整		焼 成		備 考 () 推定値cm	
				口径	底径	器高						外 面	内 面	炎	良否		
Ba03 溝出土物	1	17-1	14-1	B b50	(15.5)	5.9	(5.2)	—	平底	ロクロ	回転糸切	礫 普	ロクロ	ロクロ	還元 普	内面に糸くず痕	
	2	"-2	"-2	C e77	(18.3)	—	—	複 合	—	ロクロ	—	礫 普	ロクロ・叩目	ロクロ(叩目)	還元 普	自然釉、刻印様傷	
	3	"-3	"-3	"	(18.0)	—	—	"	—	"	—	粗砂	ロクロ	ロクロ	" "	口縁内自然釉	
	4	"-4	"-4	B f56	—	(7.1)	—	—	平底	(ロクロ)	回転糸切	礫 "	"	"	(酸化)	"	(中世陶器)頸部あり
	5	"-5	"-5	B e56	—	(11.2)	—	—	揚底	(ロクロ)	—	細砂	"	"	還元	"	底菊花状模様
	6	"-6	"-6	B g66	—	(6.6)	—	—	平底	ロクロ	回転糸切	細砂	"	"	(酸化)	"	おろし皿、自然釉「胎分資料」
	7	"-7	"-7	B j68	—	—	—	—	—	—	—	礫	—	当て工具痕	還元	"	内面半円周 砥石として使用



第17图 溝出土物

S=1/3

内面は下部程黒味を増す。4)は頸部及び底部片で、直接接合しないが推定図を示した。ロク口整形で、外面は灰褐色(5YR $\frac{6}{2}$)、内面は赤灰色(2.5YR $\frac{5}{1}$)、断口は鈍橙色(2.5YR $\frac{6}{3}$)、胴張りであるが器壁は薄く、所々に積上げ痕が認められる。5)は甕底部で、揚底の外面に篋様工具による花卉状文様が、糸底部には細い工具による撫で痕がある。内外及び胎土も褐灰色(10YR $\frac{6}{1}$)を呈する。6)はおろし皿と思われる陶器底部片で、釉も認められる。胎土分析結果は別記してある。7)は須恵器甕体部片を砥石として使用している。

(Cb77溝)

〔規模・埋土・遺物・その他〕長さ約6m、上端巾約2m、下端巾約1m、深さ約50cm、底部西側が低く、検出西端は閉じている。北東端は浅い溝と連らなっているが切合いの関係にも見える。いずれにしても単独で機能した可能性は考えられないがどの溝と関連があるのか不明である。埋土は黒褐色や暗褐色が大半を占め、北壁寄りには炭・焼土が、又酸化鉄の沈着も見られる。遺物は底部より、陶器底部片、須恵器片が出土した。陶器片は灰釉のかかった $\frac{1}{2}$ 底片で、胎土色調は鈍黄橙(10YR $\frac{7}{2}$)、体下部に削り調整、底部は回転糸切の後削り調整が、施されている。胎土分析結果は別記の通りとなる。

(Cc62溝)

〔規模・埋土・その他〕長さ約16.50m、西側上端巾約70cm下端巾50cm、東側上端巾約1.20m下端巾80cm、深さ西側約15cm東側35cmである。底面は東側に傾斜している。横断面は逆台形である。埋土は黒褐色土・黒色土を主体にし、若干のシルト・中礫もしくは細礫を含む層もあり、大半は自然堆積物と思われる。この溝の西端底面標高は高くなり、削平により消滅したと思われる。北側にある高低差50cmの平坦面も過去においてはもっと高かった可能性もあり、この溝と何らかの関係の有していたとも考えられる。特に(Ca62) 縦穴状遺構の張り出し部及び、平坦部への削り込みはほぼこの溝に接する点、留意する必要がある。また、検出面におけるものではあるが、東端が閉じている点、溝の機能として特殊な形を考える必要がある。

5) 掘立柱様柱穴群について(第19、20図)

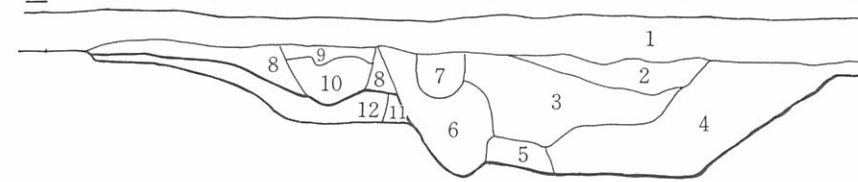
調査地D区の焼土遺構の西側に多く検出された。地形の状況・地質に応じた工事がなされ、土壌が設けられたと思われるが、D区の南西地区は同じような土壌が多数検出され、その柱関係を解明する上で多くの問題が残る。この事は調査時点よりの問題でもあり、大前提であるべき性格付にかかわるものであった。作業段階の仮説は調査の進行にともない変化し現在の形に至っている。いずれにしても調査事項に関して統一した記録を残す必要があり、その点におい

(Cb77) 溝「Ca80南北ベルト断面図」

1層	極暗褐色 (7.5YR $\frac{2}{5}$)	腐植土層 (炭若干含む)
2層	暗褐色 (7.5YR $\frac{3}{5}$)	" (4層より暗色)
3層	" (" $\frac{3}{5}$)	" (4層よりシルト質土多し)
4層	黒褐色 (" $\frac{2}{5}$)	" (軟質、遺物含む)
5層	" (" $\frac{2}{5}$)	" (粘質土塊含む)
6層	" (" $\frac{3}{5}$)	" (シルト質土、混合層、焼土炭若干含む)
7層	暗褐色 (" $\frac{3}{5}$)	" (シルト質土、粗)
8層	褐色 (" $\frac{4}{5}$)	シルト質土 (粗、軟質)
9層	" (" $\frac{4}{5}$)	" (シルト質土塊、人為的埋土)
10層	暗褐色 (" $\frac{3}{5}$)	" (密)
11層	褐色 (10YR $\frac{4}{5}$)	砂層 (地山)
12層	明褐色 (7.5YR $\frac{6}{5}$)	砂質土 (粗、粘性なし)

(Cb77) 溝 土層断面図

(1m) 「1m」 (2m) (3m) (4m) 「4m」SL-133.00m (Ca83)



(Ba65)

(Ag53) 溝

0m 1m 2m SL-132.00

- I層—黒褐色(5YR $\frac{5}{5}$)IV $\frac{1}{5}$ 土 (耕作土)
- II層— " (" $\frac{5}{5}$)土 (粘性増す)
- II'層— " (")土 (地山質細砂を含む)
- III層—褐色 (7.5YR $\frac{5}{5}$)土 (地山質、細砂を含む)
- IV層—鈍黄褐色 (10YR $\frac{5}{5}$)土 (地山がくずれたもの)

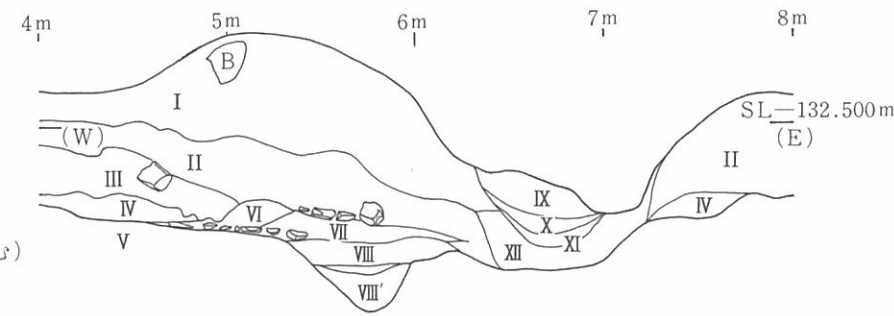
(Ag53) 溝「Bg68付近」土層断面図

(Ba50)

(Ba03) 溝

(Ba03) 溝 土層断面図

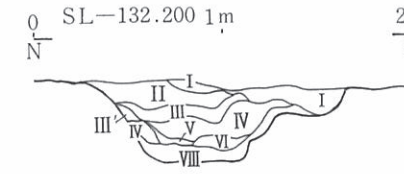
- I層—黒褐色 (7.5YR $\frac{5}{5}$)土 (耕作土、Bの地山質塊含む)
- II層—黒色 (7.5YR $\frac{5}{5}$)土 ("、礫含む)
- III層— " (" 1.7/1)土 (旧表土、礫や遺物含む)
- IV層— " (10YR ")土 (酸化物、地山質土含む)
- V層—黒褐色 (" $\frac{5}{5}$)シルト質土 (礫を含む)
- VI層— " (" $\frac{5}{5}$)砂質土 (礫を含む)
- VII層— " (" $\frac{5}{5}$) " (礫含む、植物体多量、遺物を含む)
- VIII層—オリーブ黒(5Y $\frac{5}{5}$)含層細礫シルト質土 (粘質土も含む)
- IX層—褐色 (7.5YR $\frac{5}{5}$)土 (用水路底土積上部)
- X層—暗褐色 (" $\frac{5}{5}$)砂質土 (水路底)
- XI層—褐色 (" $\frac{5}{5}$)土 (水路底、粘性土)
- XII層—黒色 (" $\frac{5}{5}$)土 (地山質塊を含む、新しい溝の掘り込み)



(Ca71)

(Ca65)

(Cc62) 溝



(Cc62) 溝土層断面図

(E15・S6.5付近)

- I—褐色 (10YR $\frac{4}{5}$)土 (開田時攪乱土?、レキ含む)
- II—黒褐色 (10YR $\frac{5}{5}$)土 (黄褐色土含む、酸化鉄分含む?)
- III— " (10YR $\frac{5}{5}$)土 (褐鉄鉱が壁近く下部境界に層状に入る)
- III'— " (10YR $\frac{5}{5}$)土 (地山質土塊及び霜降り状を含む)
- IV— " (10YR $\frac{5}{5}$)土 (地山質土塊多い、炭化物含む)
- V—黒色 (10YR $\frac{5}{5}$)土 (シルト質・炭質物多い)
- VI—黒褐色 (10YR $\frac{5}{5}$)土 (地山質多い、褐鉄鉱VIII境界部に入る)
- VII—黒色 (10YR $\frac{5}{5}$)土 (地山質Vより多い)
- VIII—黒褐色 (10YR $\frac{5}{5}$)土 (境界部に地山質多く含む、霜降り状同)

(Da71)

(Da83)

第18図 溝状遺構 (縮尺=1/160)

てこれら土壌の類型化を行い、記録を残した。それには、形態（平面形・断面形）埋土の状態に主眼を置き、それぞれの分類と組合せにおいて、以下の6型式の区分をもって対処した。

A型式—暗褐色（7.5YR $\frac{3}{3}$ ）腐植土1層のみで明褐色（7.5YR $\frac{5}{6}$ ）シルト質土をほとんど含まない。断面形は上端も下端もほぼ同径で深いものが多い。

B型式—暗褐色腐植土と黄橙色（7.5YR $\frac{7}{8}$ ）土の混土でしまりは悪い。黄橙色土は拡散して霜降り状に含まれる。断面形状はA型式に似ている。

C型式—暗褐色腐植土と黄橙色土の混土で非常にしまっている。A型式より上端・下端径は比較的大きく、浅い。（礫を含むものもある）

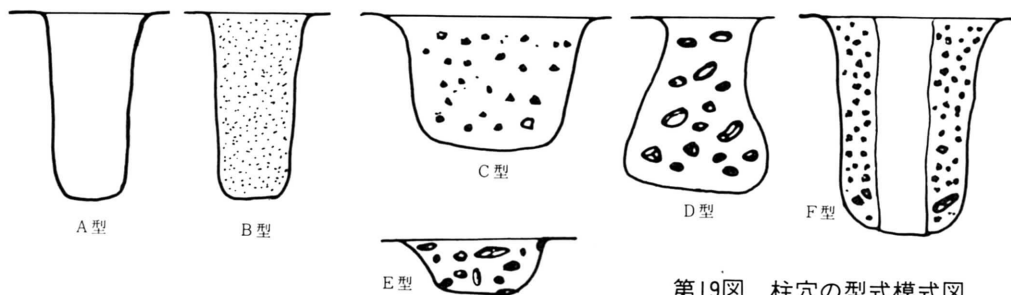
D型式—暗褐色腐植土に1～20cm径の礫を多量に含む。断面形は下方が広がるもの多い。

E型式—黒色（7.5YR $\frac{1}{2}$ ）・ないし黒褐色（7.5YR $\frac{2}{2}$ ）腐植土の中に砂粒や1～15cm径の礫を含み、比較的浅いものが多い。

F型式—掘方様の平面・断面形を持つ。中央の埋土はA型式、周りの埋土はC型式に類似し礫を含むものもある。

以上の類型において、多いものは、D型式・E型式のものであり、調査地D区の南西部に多い。この地区の検出面は基本層序8層に該当すると言っていい程上位層が薄い。（地形的に幾分傾斜し低いとは言え、下位の層が、他の層とほぼ同一標高で確認されるのは、この8層が波打っているからである。）この地区においては検出面即生活面であった可能性も強く、柱を据える為の掘り方は下方が広がり、埋土に礫を多く含む事になる。E型式については部分的な削平が考えられるが、本来の形態の場合は問題は残る。

次に配列状況とこれらの類型について関係を見ると特に強い結びつきは見られず、前述の様な地域的な制約によったのではないかとの見方が出来る。これら配列についての線引きは調査時の担当者が試案を作成し、結果としてほぼ同様に追認されたものである。それに従って考えられる建物の柱穴として調査時に明確に出来なかった物を含む事は今後の課題でもあるし、他にいずれの建物にも属さない柱穴様土壌（以下柱穴と記す）が存在する事も今後考慮する必要がある。現段階においては以下に示す6棟の建物が考えられる。

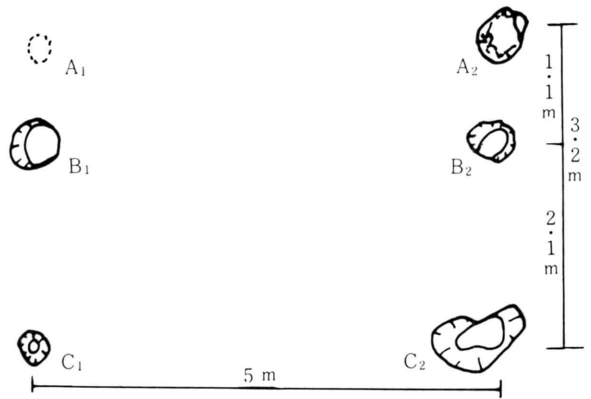


第19図 柱穴の型式模式図

〔第1 (Ci65) 建物〕 (第20図、第11表)

梁列方位は北より17°だけ西へ角度が偏っている。この建物は3.2×5.0mの広さである。この身舎の桁行は約5.0m、梁行は2.1m・1.1mと変則的である。廂が存在したとすれば北面の可能性が大である。北西隅は古代竪穴式住居跡にかかる。規模等から推定すれば、物置等の類のものであろう。時期についても不明である。

第11表	A ₂	B ₁	B ₂	C ₁	C ₂
上端径 cm	45	52	45		
下端径 cm	32	40	31		
深さ cm	34	35	31		
下端標高m	130.96	131.02	130.97		

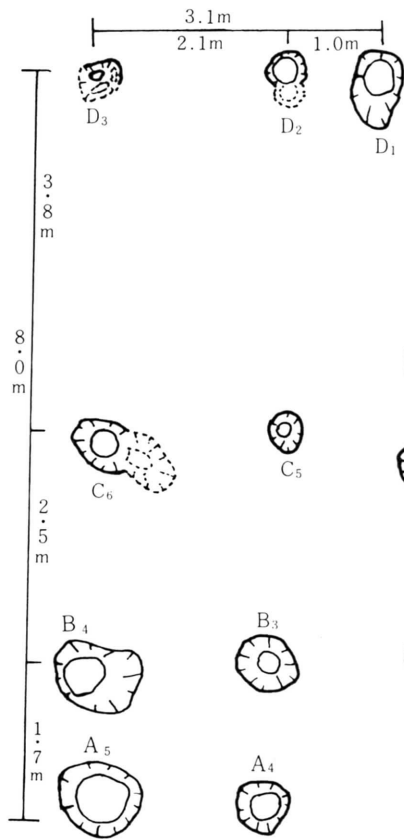


第20図 第1 (Ci65) 建物跡

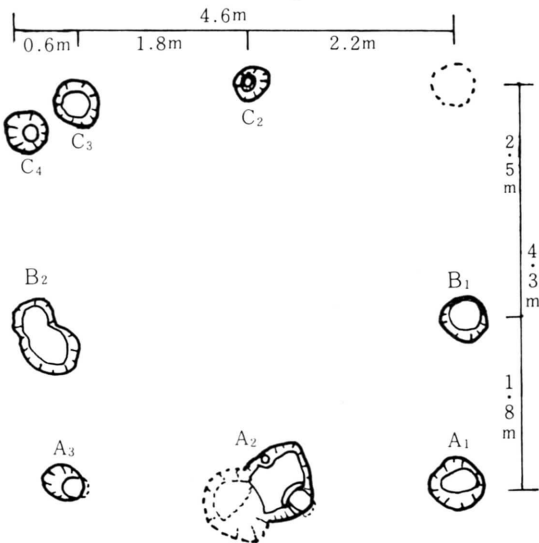
〔第2 (Cj56) 建物〕 (第21図、第12表)

梁列方位は西より24°だけ南へ

偏っている。曲り屋様の配列である。折曲部の柱穴の関係は不明である。西側部の桁行は南側より4.4m・3.6mとなるが梁行は東側より2.5m・1.8mとなる。東部の桁行は3.8mとなり、梁行は南側より1.0m・2.1mである。



第21図 第2 (Cj56) 建物



第12表	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	A ₅	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	C ₂	C ₃	C ₄	C ₅	C ₆	D ₁	D ₂	D ₃
上端径 cm	52	23	37	53	85	45	(65)	—	80	33	45	44	38	60	—	42	—
下端径 cm	33	15	26	32	65	35	(45)	—	45	10	30	16	15	29	—	30	—
深 さ cm	67	25	34	41	30	38	36	—	52	37	55	42	21	39	—	40	—
下端標高m	131.32	131.72	131.66	131.62	131.39	131.64	131.61	—	131.48	131.52	131.41	131.55	131.67	131.51	—	131.98	—

〔第3 (Da53) 建物〕 (第22図、第13表)

梁列方位は西より29°南へ偏っている。広さは4.6×11m²である。桁行は北側より2.4m、1.8m、3.4m、3.0mである。梁行は3.4m、1.2mである。この建物の西側の部分は奥行が小さい。試案の段階にては、西側に1間又は廂の存在を想定し線引きして見たがこれらについても明確に把握できない。



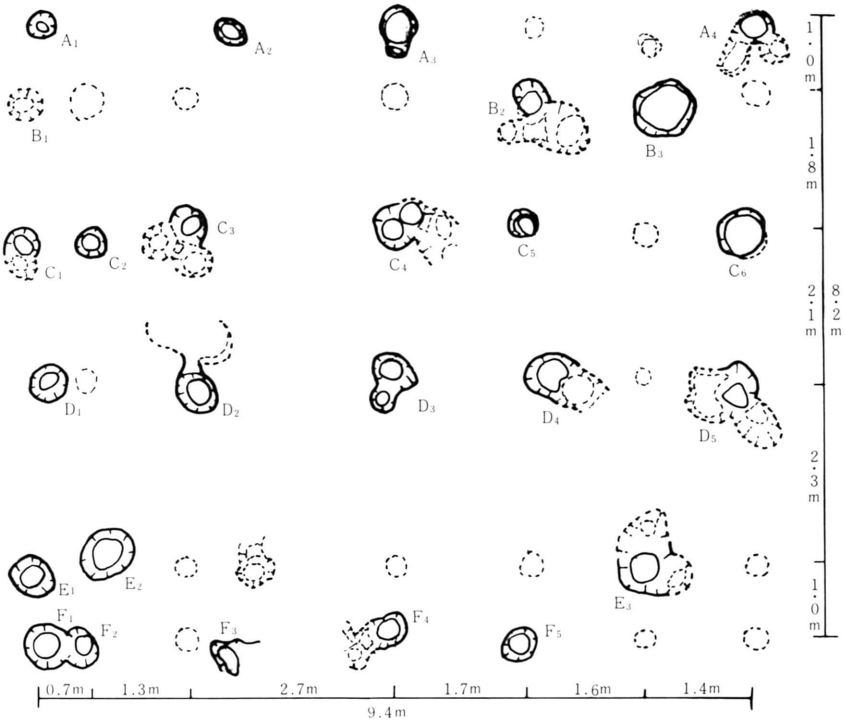
第22図 第3 (Da53) 建物

第13表	上端径 cm	下端径 cm	深 さ cm	下端標高 m
A ₁	60	40	39	131.69
A ₂	37	25	26	131.78
A ₃	(80)	22	48	131.54
A ₄	(51)	33	45	131.76
B ₁	39	20	25	131.83
B ₂	—	—	—	—
B ₃	32	25	42	131.80
C ₁	57	45	81	131.19
C ₂	38	30	65	131.32
C ₃	48	40	24	131.81
C ₄	50	40	24	131.81
C ₅	(65)	(30)	66	131.61

〔第4 (De53) 建物〕 (第23図、第14表)

梁列方位は北より30°西へ偏っている。8.2×9.4m²の広さであるが、間数の多い建物である可能性も大である。(但し間柱の不明な数も多いが。)南・北・西にそれぞれ廂の存在も考えられるが、身舎同様不明な柱穴が多く又、他の三つの建物と切り合い関係にもあるので問題点は多い。身舎桁行は東より1.4m・1.6m・1.7m・2.7m・1.3mである。梁行は2.3m・2.1m・1.8mである。南側の廂は梁行が1.0m、西側の廂梁行0.7m、北側の廂梁行1.0mとなる。廂部分の未検出柱穴は南側3、北側2である。身舎部の未検出柱穴は、南側6柱穴中の4柱穴と半分以上で、北側も同様に4柱穴でしかも隅を欠いている。前述の様に当調査地に於ける内では規模も大きく、又切合い重複の関係にあり課題も多く残る。

第14表	A ₁	A ₂	A ₃	3-A ₂	3-B ₂	A ₄	B ₁	B ₂	B ₃	C ₁	C ₂	C ₃	C ₄	C ₅
上端径 cm	36	36	47	27	—	45	45	45	75	44	40	50	47	40
下端径 cm	15	24	38	25	—	32	22	33	57	24	25	26	26	20
深さ cm	25	24	60	26	—	32	36	38	20	27	32	38	38	59
下端標高 m	131.99	131.99	131.55	131.78	—	131.74	131.77	131.75	131.89	131.94	131.88	131.72	131.74	131.91
	C ₆	D ₁	D ₂	(D ₃)	D ₄	D ₅	E ₁	E ₂	E ₃	F ₁	F ₁	F ₃	F ₄	F ₅
上端径 cm	63	47	55	55	60	(55)	53	65	(70)	57	47	57	47	45
下端径 cm	56	(25)	32	32	40	(30)	29	40	37	32	23	44	29	27
深さ cm	70	12	31	39	41	68	29	50	61	27	24	36	29	25
下端標高 m	131.25	132.00	131.87	131.71	131.68	131.31	131.77	131.59	131.39	131.78	131.78	131.74	131.88	131.76

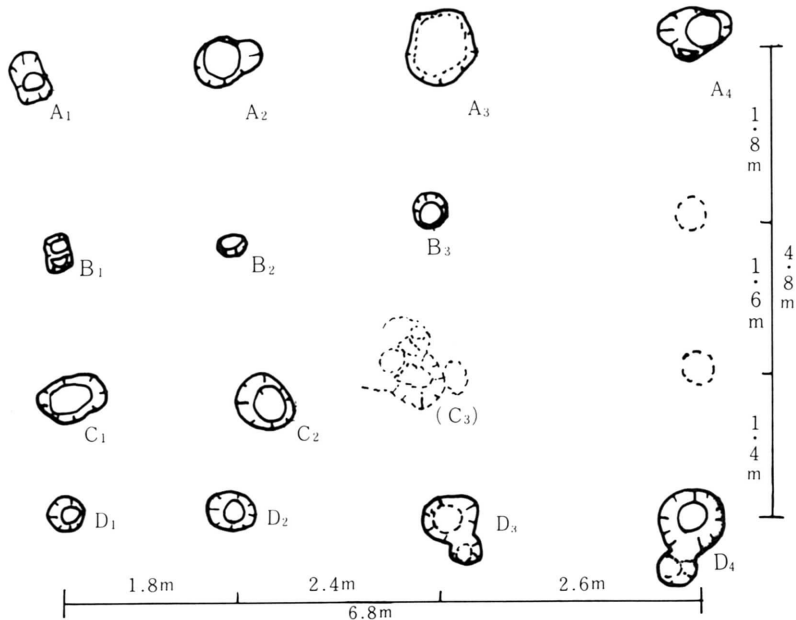


第23図 第4 (De53)建物

〔第5 (Dc56) 建物〕 (第24図、第15表)

梁列方位は北より16°東へ偏っている。広さは4.8m×6.8mである。桁行は東より2.6m・2.4m・1.8mで、梁行は南より1.4m・1.6m・1.8mである。北側と西側柱穴列が基準となり考えられた。東辺及び隅の柱穴は未検出で、南辺は後述の第6建物との関係より属性が明確でない。西側はほぼ等間であるが、東程細長くなる。(4-B₃)と表示した柱穴は第4建物と重複しているが中心はこの建物に沿っている。C₂・C₃は柱穴列から幾分離れすぎた物である。重複した物は他に(4-D₃)・D₄(6-A₅)がある。A₄から出土の古銭は、他の出土物と共に26図に示してある。

第15表	A ₁	A ₂	(4-B ₃)	A ₄	B ₁	B ₂	B ₃	C ₁	「C ₂ 」	「C ₃ 」	D ₁	D ₂	(4-D ₃)	D ₄
上端径 cm	35	(50)	75	30	26	27	38	(63)	57	55	35	45	55	70
下端径 cm	21	40	57	21	17	17	21	(37)	35	(30)	20	24	32	30
深さ cm	37	59	20	18	51	29	36	24	70	30	32	33	39	34
下端標高 m	131.68	131.51	131.89	131.82	131.68	131.84	131.74	131.95	131.41	131.83	131.86	131.85	131.71	131.68



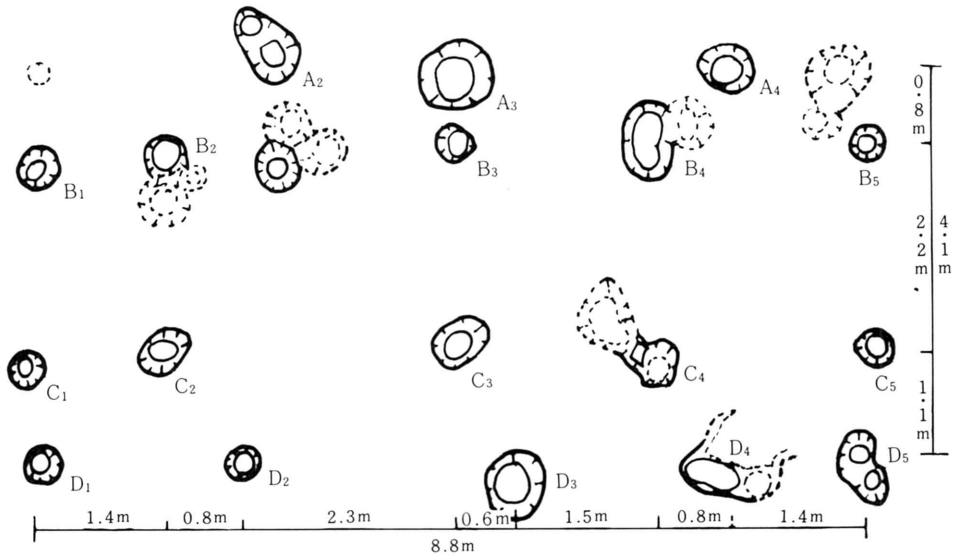
第24図 第5 (Dc56) 建物

〔第6 (De53) 建物〕 (第25図、第16表)

梁列方位は第5建物と同じである。広さは4.1m×8.8mである。柱穴配置として、四面廂とした場合は東側に特異な形の廂を考えなければならない。身舎部分の桁行は東から2.1m・3.1mで、梁行は2.2mである。東側の廂は北より0.8m・2.2m・1.1m、南側は東より1.4m・2.3m・2.9m・(2.2m)、北側は東より1.4m・2.8m・2.0m・(2.5m)となるが、()の値はそれぞれの

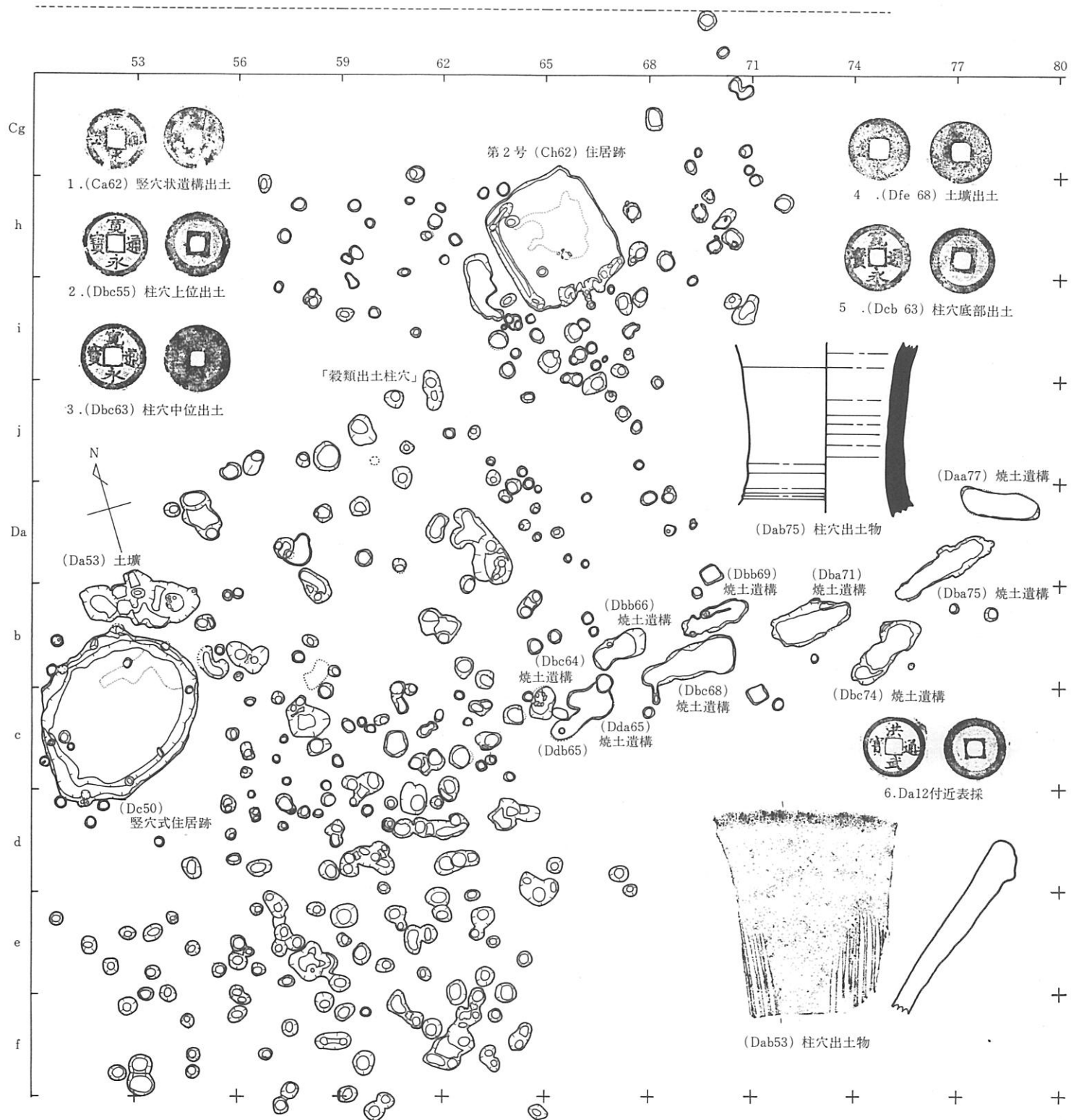
端における廂桁巾と言えないものである。以上は検出柱穴をすべてあてはめたものであるが、検出不能な物は北西隅であった。西廂の梁行が東のそれと同じ場合は、更に2柱穴が未検出だった事になるが東側にも同様な事が言える。南廂と北廂の柱穴が対称形に配置されたとすれば更にD₂に対応する物が必要である。この場合新たにA₂までの間隔が問題となる。重複した柱穴は(5-D₄)(4-F₃)である。

第16表	A ₂	A ₃	A ₄	(5-D ₄)	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	B ₅	C ₁
上端径 cm	(55)	75	50	70	45	45	40	(50)	35	37
下端径 cm	(25)	43	30	30	22	32	25	(24)	20	18
深 さ cm	41	18	41	34	36	29	20	25	11	27
下端標高m	131.77	131.98	131.63	131.68	131.77	131.89	132.00	131.83	131.92	131.91
	C ₂	C ₃	C ₄	C ₅	D ₁	D ₂	D ₃	(4-F ₃)	D ₅	
上端径 cm	50	(52)	(50)	38	40	37	65	57	47	
下端径 cm	26	30	25	23	20	24	40	44	20	
深 さ cm	45	37	42	26	36	44	50	36	34	
下端標高m	131.74	131.76	131.71	131.78	131.77	131.77	131.59	131.74	131.72	



第25図 第6(De53)建物

第17表	名称	出土位置	外縁外径	内径	内縁外径	内径	外縁厚	重量	備考(前欄の径・厚はmm、重量はg)	図番号	写真番号
1	寛永通宝	Ca62南東すみ	22.6	約17.6	約8	6.4	約1.4	1.6	一部欠損 全体に錆多く不明	26-1	-
2	"	Dbc55pit(上)	24.3	19.9	6.95	5.5	1.25	2.8	古寛永、無背、外縁欠損	26-2	17図
3	"	Dbc63pit(中)	24.65	19.8	6.9	5.3	1.2	3.1	古寛永、無背、外縁一部欠損、裏面摩滅	26-3	"
4	"	Dcb63pit(底頂)	24.2	19.6	7.4	6.2	1.1	2.2	古寛永、無背	26-5	"
5	不明	Dfe68土壌	23.1	測定不能	7	約1	1.7	1.7	摩滅と錆かひどく不明	26-4	"
6	洪武通宝	Da12付近表採	22.9	18.9	6.7	5.8	1.5	3.2	明銭(1368年初鑄)	26-6	"



第26図 C・D地区柱穴様土坑群及び遺構配置 出土遺物

V まとめ及び今後の課題

本調査地において縄文時代の遺構と思われる竪穴や遺物が認められ更には古代の住居跡・溝、近世の掘立柱建物跡等が認められた。

縄文時代の時期を明確に示すものは、第一号土壌(Db53-1)出土物(1)の土器口縁片である。これは既述の通り耳状の把手様装飾を施されたもので、岩手県滝沢村卯遠坂遺跡にて縄文時代後期初頭とされた物に類似している。同様の物は北上市更木遺跡にも出土例がある。

古代の住居跡として明確な、第三号(Dc12)住居跡・第四号(Ej15)住居跡は東向きのカマドを持ち、ロクロの技法を示す土師器を出土している。この2住居跡には火災等の原因で残存したと思われる炭化材がありそれぞれの¹⁴C測定結果は「第三号住居跡-1170±60yB.P.(1130±55yB.P.)、第四号住居跡-1200±75yB.P.(1160±75yB.P.)」と出ている。ロクロ技法の新しいさと¹⁴C測定結果を考え合せ、平安時代の遺構である事は断言出来る。遺跡の北方には上平沢新田遺跡があり平安時代集落が確認されているが、ここに於いても住居跡構造を示唆する炭化材・壁材までが残存している点等、廃棄原因の共通性の有無の問題等今後に残される課題は多い。

中世の時期の遺構として明言出来るものはない。遺物としては表土よりの出土であったが、天目茶碗があった。これの産地・時代について現在未確定である。灰釉陶器底部を出土した(Cb77)溝及び卸し皿を出土した(Ba03)溝の遺物における下限を考えた際、中世遺構の存在した可能性は充分に残ると思われる。

近世以降の遺構として掘立柱建物跡が考えられる。これらは柱穴様土壌検出の後、その配列等考慮しながら発掘したが最終的(現段階における)には、複雑な重複を見せる建物の図上復元結果が前項にて述べられた。これら建物の間取り等今後の課題として残る。近世以降としたのは柱穴中に寛永通宝の出土を見た事による。しかし柱穴様土壌について再検討した場合、近世以前の物が明らかになる可能性もあろう。それらの点、調査時の反省も含め今後の課題としたい。尚、(Cja60)柱穴様土壌よりアズキ・コメ・オオムギ等の穀物炭化物が百数十粒出土した事を付記しておく。

以上の様な調査結果より遺跡の性格として、縄文時代より現代まで、途中空白の期間があるが、人間の生活の場として本調査地域が存在した事がいえる。遺跡の空間としての広がりには調査地区の西側及び南北方向への延びが考えられる。特に西側には平安時代住居跡の存在の可能性が甚だ大である。

《参考文献》

(自然科学関係)

- 中川 ほか 北上川中流沿岸の第4系及び地形(地史) 地質学雑誌第69巻 812号 1963. 5
日本地質学会第80年総会見学旅行2資料 北上川低地帯の鮮新統第四系地形 1973
- 佐藤二郎 考古学のための地質学—岩手県文化課における講演資料— 1978. 8
- 町田 洋 火山灰 岩手県(財)埋蔵文化財センター主催講演会資料 1979. 6
- 井上克弘) 東北地方における奈良~平安時代遺跡埋土中の粉状パミスについて
山田一郎) —岩手県教育委員会文化課依頼分析結果より 1981. 11. 24
考古学と自然科学 第1号~第10号
- 町田 洋ほか 日本海を渡ってきたテフラ—科学vol.51 No.9 1981. 9
- 三辻利一 土器の産地 —科学朝日—6月号— 1981. 6
- 岩手県農政部 土地分類基本調査 日誌(1/5万) 国土調査 1974
北上山系開発室
- (縄文時代以降関係)
- 今村啓爾 縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較、物質文化No.27
- 宮沢、今井 縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題—いわゆる落とし穴について—
1976
調査研究集録第1集 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 霧ヶ丘調査団 霧ヶ丘 1973
- 岩手県教委 岩手県文化財調査報告書 第31・32・52・53・54・57集
日本道路公団 本調査関連報告書 I・II・III・IV・V・VIII 1979~1981. 3
- 岩手県教委・国鉄 第48集東北新幹線関係報告書IV宮地遺跡 1980
- 岩手県(財)埋文センター
県土木部 岩手県(財)埋文センター報告書第13集 繫III遺跡 建設省御所ダム事務所
- 北上市史編纂委員会「北上市史 原始—古代」北上市史刊行会
- 青森県教委 青森県文化財調査報告書 第37集 青森市三内遺跡 1978. 3
- 岩手県教委 「岩手の古民家」(佐藤 巧) 1978



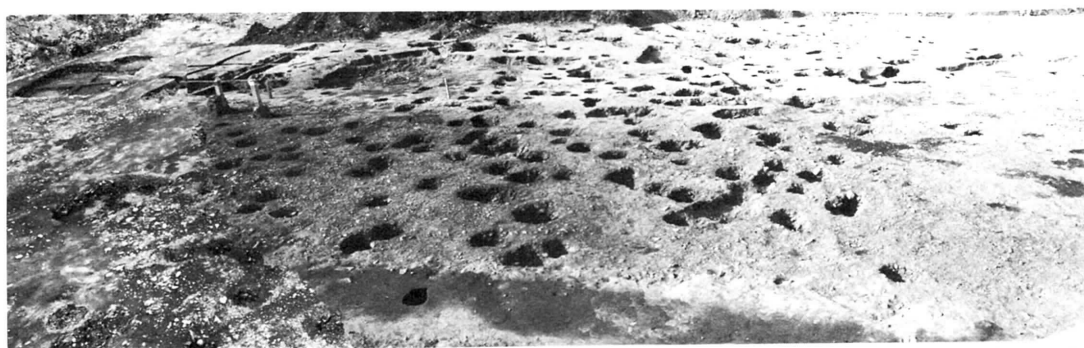
ABC区全景（西より）



C区全景（西より）



D区全景（西より）



D区全景（南より）

第1図 遺跡全景



D区(Dc50
以東柱穴様土壌)

第2図
D・E区
全景

D区焼土遺構全景



E区全景(西より)



D・E区全景(北東より)

